
魔法少女リリカルなのは -混沌の賢人-

死食經典義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは -混沌の賢人-

【NZコード】

N1840

【作者名】

死食経典義

【あらすじ】

混沌なる賢者の石、その名を持ち、永久のときを生きる者がいた
死ぬことは許されず、世界を見続けて行く

彼が織り成す物語は世界に何をもたらし、紡いでいくのだろうか

プロローグ①（前書き）

死食經典義「はい、やつてしまひました。魔法少女リリカルなのは
Strikers THE CRUSHERがまだ全然進んでないのに新規投稿開始！！！待てと言われてももう止まりません。こんな自分の作品ですがよければ読んで下さい」

プロローグ01

遙かなる昔、現代の人々がアルハザードと呼ぶ世界があった。はじまりの王により統治が行われたその世界は安定と平和がもたらされていたが、裏で蠢く者は少なからず存在していた。

その物達は殆どが行動を起こす前に始末されていたが、その手を逃れた者達が今、一つの実験を行おうとしていた。

「首領、準備が完了いたしました」

「『』苦労だつた。では、早速始めるとしようか」

「了解いたしました」

「くつくつく・・・この実験が成功すれば、はじまりの王など取るに足りん！－さあ、我らが霸道の始まりだつ－！－！」

同時刻 地下闘技場

ここは先ほどの首領が隠し持つ地下闘技場。今此処には彼らが各地から密かに買い集めた奴隸、666人がを集められていた。

「おーい、666号」

丸眼鏡をかけた10歳くらいの少年が一人の男性を呼びながら走っていた。

その声に反応したのは白銀の髪を無造作に伸ばした20前後の青年。道を歩けば女性は十中八九振り返るほどの美形だが、如何せん目付きの悪い

「んあ、何だ534号か」

「何だはないつしょ、僕達は友達だろ」

「259号みたいな美人に話しかけられるの一绪にいてもむさ苦しいだけの男、どっちを取るかは言わんでもわかるだろうが」

彼らには名前がない。赤子の時に売られたり、記憶を消されたりしている為だ

「あり、褒めても何もでないわよ?出せても一晩一緒にいるくらいよ」

「ん、いたのか259号。俺はそれでもいいぜ」

彼らの元に現れたのは、背の半ばまで伸びる美しい緑色の髪を持つ美女。モデル顔負けのスタイルを持ち、奴隸内ではアイドル的な存在だ

「ふふ。相変わらずね、あなたは」

「褒め言葉として受け取つておくれぜ」

今此処に集まつた259号、534号、666号。この3人は馬が合う為、よく一緒に行動している

「それにしてもよ、いつたい何なんだ?」云々いる奴等を全員集めて何する気なんだか

「殺し合ひじやなかつたら、僕はいいけど

「あら、殺し合ひでもいにじやない。666号と一緒にいれば間違いなく生き残れるんだから

「殺し合ひながら任せとおけ。お前ら以外皆殺してやるから

「あはははは・・・」

「期待してゐるわよ、666号

そこへ、彼らを集めた張本人がやつてきた

闘技場を一望できる高台から彼らを一瞥し張本人、首領を呼ばれていた男は言い放った

『諸君、今日集まつてもうらつたのは他でもない。君達を解放するためだ』

魔法を使い増幅された声が闘技場内に響いた

そしてその内容に奴隸達はざわめいた。此処から出れると喜ぶ者、出ても樂が出来るわけじやないと罵倒する者

首領はそのざわめきがいつたん落ち着くのを待つ、からかひつて放つた

『ただし無条件に出れるわけではない。今から行つ実験に耐えることのできた者を開放する』

その一言で再度闘技場内はざわめいた

「実験つてなんだらうね？出れるのは嬉しいけど」

「やーな。どうせ碌なもんじゃねーのは確かだ」

「どんな実験かしらね。ま、私は耐え切つて此処から出させてもらひけどね」

『なお、君達には拒否権は一切存在しない。ではコレより実験を開始する！』

そういう残し、首領は高台から姿を消した

「転送魔法で移動したみたいね」

「直ぐにいなくなるつてことはさ」

「やばい実験かもな。ま、お前らは出来る限り俺から離れるなよ。その方があんぜ・・・・なんだ！？？」

突如として地面が光りだし、その光は闘技場の壁を走るよに広がつていく

その光景に奴隸達は声を失っていた。その光が黒い光りだったためだ

自然にはない光に、見惚れる者、恐怖する者。その場にいた全員が声を出すことを忘れている

そしてその黒い光は壁から離れさまざま方向へと進んでいく

その光景を上空から見ていた者がいれば、円状の闘技場に黒い光で正五角形と五紡星の魔方陣が描かれていくのが見れただろう

だが、奴隸である彼らにそれを知る術はない。そしてそれがもたらす結果も・・・

魔方陣が完成し、闘技場を黒い光が包み込んだ

「くっ・・・」

余りの黒い眩しさに666号は眼を腕で隠した

そして光が收まり、666号は腕を下ろし辺りを見渡した

「何だつたんだいつたい・・・・・・つ！？」

彼の目に飛び込んできたのは地面に倒れている同じ奴隸達の姿だった

「いつたいどうなつたてんだ。そだ259号と534号は、二人とも無事か！」

自分の後ろにいた筈の一人に声をかけるが反応が帰つてこない

後ろを振り向くと周りの奴隸達と同じように一人とも倒れていた

「ちっ！一人とも起きる…！」

666号は一人を揺するが起きる気配が、いや生きている人間の気配がなくなっていた

「おい、マジかよ！？」

慌てて一人の心臓に手を当てるが、その心臓は動いていなかつた

「…前からの約束だつたからな。259号お前のその髪、形見として貰つていぐぜ」

666号は靴のそこには隠し持つていた折りたたみナイフを取り出し、259号の髪を切り取つた

そしてその髪を//サンガのようにならに編みこみ、自身の髪を纏める紐にした

666号は暫く259号と534号を見下ろし感慨耽つていたが、足音が聞こえたため見る」とをやめてその音の方向に振り向いた

振り向いた先には首領とその部下数人がこちらを見ていた

「ほう、実験は無事成功したようだな」

「そのようですが首領。コレで更なる力を手に入れることが可能となりました」

「手はずを整えて置けよ。いつ王の手先が来るかわからんからな」

「直ぐに取り掛かります」

666号はその会話が理解できていなかつた

「おい、どうこうとか説明はしてくれるんだらうな」

「ん~貴様などに話しても理解できんだろうが、まあいい話してやるう。今回行つたのは賢者の石の精製だ」

汚物を見るよつに一瞥したが、機嫌が良かつたのか首領はそのまま話し出した

「賢者の石の精製・・・」

「賢者の石は知つてゐるかな。魔法生物や人間が持つリンカーノアを特殊な魔法を使用し外部に露出、そして物質化させ魔力の塊としたのが賢者の石だ。凶悪な生物や犯罪者の無力化の為に行使され、出来た石は医療や魔力の外部ブーストとして使われているのだよ」

「それで?」

「普通ならば一対象に対して行つたが、生成魔法を拡大し魔方陣にいる者を全てを一つの石にすることが可能となつた」

「で、その石はどいにあるんだよ?」

「石は貴様の体だ」

「なに?」

「生きた人間を石の材料とし、その石を生きた人間に内包する。これが今回の実験の目的なのだよ」

—

「実験は見事に成功した！！石となつた貴様は無尽蔵の魔力、そして自動的に修復する不老不死の体！！！そして貴様は、我らがその力を持つための試作品よ！！！」

・・・それで俺は此処から出れるんだろうな

666号は後ろを向き259号と534号を再度見下ろした

首領はそれを見て

「なんだ、そいつらがお気に入りだつたのか？気にする」とはない、
いつかは死ぬ命を我らのために使えたのだ

その言葉に666号の肩がピクリと動いた

「その女に惚れていたのか？貴様が望むならその女をクローンし貴様に与えてやう。せめてもの褒美と思え。くあははははははははははははは！」

その声は666叩には聞こえていなかつた

「259号、534号……墓は立てれないけどよ、安らかに眠ってくれや。お前達のところこの実験をした馬鹿どもを送るからよ、そっちで好きに料理してくれ……」

二人に黙祷を捧げ、首領に振り向いた

「貴様、先ほどはをふつぶつ言つていた」

「ああ、貴様らをあの世に送るから、ボコボコにしてくれつてこいつに挨拶してたんだよ」

「ふ、面白いことをいつ。貴様にそんなことが出来る?でも?」

「出来るに決まってるだろ?が、阿呆」

「なに?...」

「てめえがさしつたんだぜ。無限蔵の魔力があるってよお

666号の周りを首領の部下達が取り囲む

「いくら魔力があろうとも、魔法の使い方を知らなければ意味がないだろ?、笑わせるな」

「ああ、俺は魔法は使えない。だけどな……」

「だけど、なんだとこりのだ」

「ただ魔力を開放するくらいなら俺にもできるだろ」

「なつ・・・・お前達！！早くあいつを捕らえろーー！」

「遅いんだよおーーー！」

666号の体を中心に魔力が放たれた。放たれた魔力は闘技場を包み込むドームとなるまで広がった

一切調整が出来ず最大出力で放たれた魔力は闘技場を一瞬で消し飛ばした

魔力が収まつた後には更地しか残つていなかつた。

259号や534号、他の奴隸達。そして首領やその部下の姿はない。魔力による破壊で塵すら残さずに消し飛んだのだ

その更地に佇むのは666号ただ一人

666号は自身の魔力で雲が吹き飛ばされた、蒼く澄み渡る空を見上げ呟いた

「俺だけが生き残つても、つまんねーんだよ・・・・・・俺もそつちに行きたかつたぜ、259号、534号・・・・・・」

その表情、その瞳はただ青く澄み渡る広大な空だけが映つていた

プロローグ①（後書き）

死食經典義「物語の始まりは、なんとアルハザードのある時代です！…！」

666号「おじクソ作者」

死「口が悪いぞ、おまえ・・・」

666号「知るかんなこと。それよりも、アルハザードから始つて大丈夫なのか？ちゃんとリリなの本編に入れるんだろうな、あ、！」

死「プロローグは3・4回で終わるから、その後リリなの無印に入る予定です」

666号「あとよお、俺の名前はビーすんだ？」のまま666号な訳ねーよなあ」

死「無論ちやんと考えてあるから安心し！」

666号「なうばよし」

死「では皆様、新しく始つた『魔法少女リリカルなのは・混沌の賢人』を宜しくお願ひします」

666号「気が向いたら感想や叱咤激励、批評とかくれや。待つてるからよ」

死「ではまた次回～」

芥「俺のこと忘れてないよな?」

死「安心しろ、ちゃんとやつてるから」

666号「更新忘れたら跡形もなく消し飛ばすから安心しとけや」

プロローグ〇二（前書き）

死食經典義「自分で驚く速度で更新です！」

666号「そーなのか？」

死「おう、自分で自分で吃驚してるよ！」

666号「そーかいそーかい」

プロローグ②

666号の魔力開放で更地となつた闘技場跡。今そこに一人の男が降り立つた

短く切りそろえた黒髪に強い意志を宿した黒瞳、モデルのようなスリムな体形を軽鎧で包みこんだ女性的な顔立ちの20代前半から半ばぐらいの男だ

「どうやら、間に合わなかつたみたいだね」

その男は周囲を見渡しながら呟いた

「今回はあちらさんに一枚取られたかな。仕方ない一応生存者を探さないと」

しかし、周囲は完全な更地。生存者の存在は皆無といつてもいいだらう

「生存者はいないか……ん、アレは？」

更地の中央、そこに何かがあることに、その男は気がついた

確認のために近づいてみると、それは地面に横たわる人間、666号であった

「おい、君。大丈夫か！？」

「あー？ 誰だ、てめーは

666号は横になつた姿勢を直さないまま答えた

「私はここにいたはずの科学者の集団を取り締まるために来たんだ。ソレよりも君のほかに生存者はいないか知らないかな」

「科学者・・・あーあのクソ野郎どものことか。あいつ等なら俺が完全に消し飛ばした。で、俺以外の奴隸仲間は此処にいるらしい」

666号は自身の胸を指差し言つた

「こつたことひめことか説明をお願いできるかな?」

「いいだろ?、俺自身整理をしたいからな。クソ野郎が話したことでいいんなら話すぜ」

「頼むよ」

そして666号は話し始めた。奴隸仲間のこと、ここにいた理由、首領と呼ばれていた科学者が話したこと、そして此処が更地になつてしまつたこと

(なんだらうな、「コイツとは初対面な筈なのによお・・・なんでこんなにベラベラ俺は話してるんだ?」)

666号はここまで饒舌に話すことはない。いつもなら必要最低限の話をして、それで終わり。しかし、今彼は初対面の男に自分の仲間だった者たちのことまで話をしている

(しかし、話をするのも悪くないかもな)

「666号の瞳は生き生きとしていた。舌が乾くことも忘れ話し続けた。そして男は一切質問をせず、666号の話を聞き続けた

「つて、訳で俺は賢者の石とかゆーのになっちゃったみたいだ」

「666号がそついこ、話を括つた

「なるほどね。彼らが行っていたのはその研究だったんだ」

「おこおこ・・・取締りに来たんだろ?ソレくらい調べておくもんじゃねえのかよ」

「手厳しいね。今回は彼らの情報がまったく入ってこなかつたから。今回でさえ、人体実験を行おうとしているつべくらこしか情報は来てなかつたんだよ」

「モーグー」としておくか

「ははは・・・」

666号はいつもの調子を取り戻していた。259号や534号の達のことから立ち直ったわけではない。彼の前にいる男の影響だろう、彼が素のままでいられるのは

「ところどよ、俺はこれからどーすりやいいんだ?」

「やうだね・・・一応私に同行してもらえるかな?君がいったいど

うなつてこるのかを調べないといけないから

「ああ、わかった・・・ソレともう一つ」

「なんだい？ 言つてみて」

「お前をなんて呼べばいい？ 僕はお前の名前を知らんぞ」

すると、男はきょとんとした顔になり、直後に笑顔を浮かべた
「『めんぬ』紹介がまだだつたね。私のことはアルつて呼んでくれ
るかな」

「アルだな。俺は『めんぬ』だ」

「・・・随分変わった名前だね？」

「クソ野郎どもが呼んでいた番号だよ。此処に来る前の記憶は消さ
れててな、自分の名前すら思いだせん」

「あ、『めん』」

「気にするな。適当に呼んでかまわん」

「君の名前はおいおい考えていこうか。それじゃ、此処から移動す
るから横に来てくれるかな」

『めんぬ』は立ち上がり、アルの横に移動した。

「それじゃいくよ」

「行へつて・・・・・」セサヒツテ行へんだけ。」

「何処かは行つてみれば分かるよ。どうやつては、こうやつてね」

地面に魔方陣が浮かび上がり666号とアルを照らし出した

「これは？」

「転移魔法だよ、コレがあれば遠くにでも直ぐに行けることが出来るんだ

・・・・・便利だな、機会があつたら教えてくれや」

「いいよ、教えてあげる。じゃ、いくよ。転移！」

666号とアルの姿がその場から消えた。その場には何もないうちと蒼く澄み渡った空だけが残つた

The image shows a vertical column of ten identical vertical lines. Each line is composed of a series of black plus signs (+) arranged in a grid pattern. The lines are evenly spaced and extend from the top to the bottom of the frame.

転送が終わり一人が着いた場所は、巨大な建造物の前だつた

「さて、ついたよ

アルが声をかけるが、666号からは反応がない。いや、反応できないと言つたほうが正しいか

「おい、アル・・・」

「なに?」

「俺の残つてゐる記憶に間違いがなければだけよ、ヒリヒリで、王宮じゃねえのか?」

そう一人の前にある巨大な建造物。それは始まりの國の王宮なのだ

「あれ、言つてなかつた?」

「言つてねえよ!?」

「今氣がついたからいいでしょ?ソレよりも中に入るよ

「お、おい。引っ張るな。自分で歩ける!」

アルは666号の手を引き、王宮の中へと入つていった

中に入り、666号はその豪華さに啞然とした

「すげえ・・・」

「ふふ、此處はいろいろな人が来るからね、多少は派手にしておか

ないといけないんだつてさ」

アルが666号に説明をしていると、やがて一人の壮年の男がやってきた

「王ー！」無事でしたか！？」

「あ、グレン。今戻ったよ」

「なあ・・・今、王って言つてたよな・・・・・・王って、始まりの王・アルハザードしかいないと思うんだがよ」

「うん、私だよ？言つてなかつた？」

「初耳だあああ！！」

壮年の男は一人の前に来るとアルに対し小言ともとれる説教を始めた

「いくら我らよりお強いからといって、単独行動をしてもうつては困ります！あなたは我らの王なのですから、もう少し自覚を持つていただきたい・・・・・とこうで、王。その者は？」

グレンと呼ばれた壮年の男は666号を訝しげに見た。その目が氣に入らなかつたのか666号はグレンを睨んだ

「彼は、あの科学者達の事件の生き残りなんだ」

「生き残り・・・では他に生存者は・・・」

「残念だけど・・・」

「そうですか……一人でも無事に救出できて何よりです」

「……それが無事じゃなれやつなんだ。詳しいことは彼の検査をしながら話すよ」

「分かりました。では検査室へ参りましょ」

グレンを先頭に3人で検査室へと向かう

「とにかく、少年。我輩はグレン・フレイヤと申す。お主の名前は？」

不意にグレンが666号に訊ねた

「名前はねえよ。呼びたけりゃ666号でも何でも好きに呼んでくれや」

不機嫌を隠そともせずに666号は答えた。答えたくとも答える名前がない。ずっと666号と呼ばれてきた彼にとって、ソレが名前に等しかった。しかしソレは名前のようにはあるがあくまでも番号。正真正銘の名前がないことに、彼は苛立ちを覚えていた

「彼は記憶を消されちゃってるみたいでね、名前がない状態なんだ」

「そうでしたか。すまなかつた、少年」

誤られるとは思つていなかつたのが、666号は慌てて言った

「いや、俺こそすまねえ。あんたに当たつても意味ないのこと」

「ふふ、後で名前考えよつね」

「ああ」

そこで話は途切れ、3人はただ検査室に向かつて歩き続けた

「到着しました」

グレンが検査室の扉を開け、アルと666号を中心に招いた

「検査室って言つてたから、なにか機材でもゴロゴロしてんのかと思つてたんだが・・・魔方陣だけかよ?」

検査室の床と壁には魔方陣が描かれている以外、他に何もなかつた
「必要なのはこの魔方陣で調べられるからね。それじゃ、早速調べ
よつか」

「王。その前に変身魔法を解除してください。検査魔法の妨害にな
る可能性がありますゆえ」

「・・・・・変身魔法?」

「あ、今解くね」

アルの頭の上に光の輪が浮かび上がり、その輪はだんだんと下へと
下がっていく

光の輪が下がりきったとき、そこには先ほどまでの男のアルではなく、短かつた髪は腰まで伸び、軽鎧は控えめな装飾ではあるが美しい白いドレスとなり、そのドレスを見事に着こなす美女が立っていた

「んー やつぱりさ、ドレスは動きにくいや

「…………女？」

「あれ？ 言つてなかつた？」

「言つてねえよ！ 今見て言葉も出でこねえよ……！」

「言葉は出でるよ？」

「モーゆー 意味じやねええ！」

そんな666号の肩にグレンが手を置いた

「少年……王は」うつ方なのだ・・・・・・

「……今の『言』、あなたの苦労が分かつた気がするぜ……・

・

「それじゃ、早く検査しちゃおつか」

一人を置いて検査のために魔方陣を起動するアル

「少年、いろいろ言いたい」ともあるだろ？ が、とりあえず検査を済ませてしまわないか

「同感だ・・・」

プロローグ②（後書き）

死食經典義「つてことで、アルハザードの王様が出てきちゃいまし
た」

666号「おー、コレは・・・」

死「はい、完全に自己分析&自己解釈でのアルハザード王です。王
としての力もあり、天真爛漫な女性でもあるよつて出来たか不安は
残るけどね」

666号「まー俺にはあんまり関係ねえな

死「（実は関係大有りなんだよねえ）」

666号「なにかいつたか？」

死「うんや、何にも言つてないよ

666号「やうか。とにかく、こつまでプロローグを続ける気
だ、ああ、ー？」

死「あ、あと2、3話は続くかもしれないです・・・」

666号「なうとつと終わらせて、本編に入れるよつてじゅうや
ダボがー！」

死「ひいっー？俺の命がピンチぼくなつてきたので、今回は此処で
失礼させていただきますー。また次回お会いしましょー————！」

プロローグ③（前書き）

死食經典義「またプロローグです」

666号「今まで続くんだよ、このプロローグってのはよ」

死「あと2・3話くらい?」

666号「ひとつと本編入れや」

プロローグ③

検査室の中では、666号の検査が行われていた

検査と言つても、体中にコードを付ける様な検査ではなく、ただ魔方陣の中に入るだけのものであるが

「おーい、まだ終わんね～の？」

ただ魔方陣の中に入るだけなので、検査される側は何もすることがない暇になる。その場にただ立つだけといつのは思いのほか疲れるものなのだ

「もうちょっととかな。もうちょっと我慢して！」

「あいよ～」

アルは入り口側の壁に描かれている魔法陣を厳しい表情で見ながら666号に返答していた

その魔方陣には、666号が立っている魔方陣から得られた666号の情報が表示されている

魔力レベルや希少技能の有無、魔法器具ならばどのような用途が可能かまでを調べ表示するのがこの検査用魔方陣である

通常であれば3～5分程度で終わるのだが、666号の検査は既に10分以上かかっていた。つまりはそれだけの情報が彼の中にあるということなのだ

だが、そんなことを666号は全く知らないし知る由もなかつた。アルが話しおれていのだから仕方がないが

先ほどの会話からさうに10分程たち、666号の検査が終了した

「あー、ただ立つてるのは辛かつたぜえ・・・」

「いや、申し訳ない、少年。此処まで時間がかかるとは思つていなかつたのでな」

666号の愚痴に苦笑をしながらグレンが答えた

「あー気にしないでくれや。ソレよりもだ、検査結果は教えてくれるんだろ?」

未だに情報が表示されている魔方陣を見ているアルに666号は問い合わせた

アルは振り向いたが、その表情はしさか厳しいものだつた

「おいおい、いつたいどーしたつーんだよ?そんな怖い顔してよ

「・・・そつだね。君にこんな顔見せて仕方ないもんね」

アルはその表情を微笑みにかえて、言葉を続けた

「まず、君の体。コレは何処も異常はないよ、いたつて普通。でも、体の内部、内部つて言つても内蔵とかじやないよ?」

「んなこたわかつてゐつーの・・・」

「魔力体っていうんだけど、その魔力体にあの実験のせいで石が融合しちゃってる状態になつてる」

「石つて賢者の石か?」

科学者達が話していた内容を思い出し、666号はソレが賢者の石ということに気がついた

「うん、でもね。通常賢者の石は一つの魔力コア分しか収容できない。ソレを術式をいじる事で無理矢理664個もの魔力体を圧縮して入れたんだろうね。君の中にある石からは想像も出来ないほどの魔力が検出されたよ」

「・・・ちと待ってくれ」

「何か質問?」

「質問つーよりも、疑問だな。あの場所で実験と一緒に受けたのは、俺を含めて666人だつたんだが、今のアルは664人つて言つてたんだよ」

そう、あの実験を行つた闘技場には科学者達を抜かして666人の人間がいた。だが、666号の魔力体に融合している石には664人分だという。コレはいつたいどういうことなのだろうか

「その説明をするね。まず、君が受け皿になつているから君の魔力体はカウントされないんだ。イメージするなら、お茶碗の中にご飯が入つてゐる状態」

「・・・分かりやすいが、その表現はどうかと思ひ『』

「そして、その圧縮生成された石の表面を常時動いている魔力体があるんだ。どうしてかは分からぬけどね」

「なるほど・・・それで664人分つてことか」

「うん。そしてこのままだと君は不完全でいづれ消滅することも分かつたんだ」

「・・・はあ！？」

いきなり自分が消滅すると言われても早々に理解は出来ないだろ？

アルは666号の反応を気にしないで話を続ける

「君の石を作るのに使われた魔法は666の魔力体を1つに圧縮するはずだったらしいけど、君が受け皿となつたことで圧縮結合されたのが665個になっちゃつたんだ。そのせいで石の中の魔力体の結合が不安定になつてるんだ。その不安定な状態を抑えているのがさつき話した動いている魔力体なんだよ」

「えっと・・・つまりどうすりやいいんだ？」

「外部から魔力体を補完しなくちゃいけないかな。そのままだといつか暴走すると思う。君の魔力はとてもない量があるから、1星系は吹き飛ばせると思つ」

「おーおー、マジですか・・・」

「うん、マジ

666号は自分をこんな風にした科学者達を、頭の中で10回ほど殺した。そんなことをしても意味はないのだが

「で、俺はどうやってその、補完だったかをすればいいんだ? 賢者の石を飲み込めばいいのか?」

「それがね・・・

アルは、そこで言葉を詰まらせる。その表情は多少曇っている

「どうした、教えてくれや

「君の石は魔力体の集合つて、さつき話したよね。この魔力体は言いかえれば魂なんだ。他者から魂を貰つて言つことになるんだ・・・」

「・・・誰かが死ぬつてことか、ソレは

「・・・・・うん」

部屋に沈黙が訪れる。

不完全なままではいずれその魔力が暴走し星系が一つ消える。補完をするとなると人が最低でも2人死ぬ

二者択一。どちらをとってもあまり気分のいいものではない

「王、少し宣じてじょつか」

アルと666叩の会話に入らず、ただ聞いていたグレンがアルに話しかけた

「その暴走は直ぐ起るのでしょうか？」

「うう。おとなしくしていれば問題はなこと思つ。でも、一回でも死んじやつと暴走する可能性はすぐ高いかな」

「他の魔法生物では代用は利かないのじょつか？」

「残念ながら……」

グレンはそこでいつたん言葉を切り、何かを思考し始めた。暫くして彼は言い放った

「ならば、我輩がその補完の一つになりまじょ

「ええつー？」

「無論今すぐという訳ではありません。我輩が死ぬ直前、そのタイミングであればなんの問題もないかと思します」

「死ぬ直前か……それは思いつかなかつたよ」

「死ぬ直前ならば、良心の呵責にもせびりますまい。いかがかな、少年」

「おっさんがソレでいひつてゆーんなら、別にいいが……本当に

「ここのかよ?」

「なに、どのみち後十数年の命よ。ならば死ぬ間際まで何かの役こ立ちたいのだよ」

そうこううグレンの口には決意が見えていた。その決意を否定する」とはグレンを否定するのと同意ともいえるくらいに

「王、宜しいですか?」

「もう決めちゃったんでしょ。私は何も言わなこよ」

「申し訳ない」

「心の優しいといふか、人が言ひと申つか・・・俺は礼を言ひ」としかできんぞ」

「ふつ、礼などこらん。これからは少年、お前に王を守つて貢うのだからな」

突如言われたその言葉に王の口は口を丸くした

「・・・どう」とへ

「我輩の命を渡す代わりに、王を守り続けてもらいたい。なに、稽古なりきちんとつけてやるから安心しろ」

「俺に拒否権は?」

「ないと思つよ。グレンは一度決めたら曲がらないから」

「は、ははは…」

「頼んだぞ少年。では稽古の準備をしてまいります」

そういつてグレンは部屋から出て行った

此処に契約は成った。ただし一方的で拒否権などなかつたが

グレンが退室

「取り合えず、検査した結果は「んなといふかな」

「こりこりと言いたことはあつたがな…」

深くため息を吐きながら、666号は言った

すると突然、アルは両手を打ち合わせた

「やうだ、君の名前決めないと…こつまでも君のままだと困るだらうし」

「あー、考えるの面倒だ。任せるわ」

だが、アルは既に思考を開始していたため、666号の言葉は聞こえていなかった

「…変な名前じゃなきやいいんだが…・・・・・」

666号はそりこながら検査室に横になつた

それから5分ほど時間がたつたくらいに、アルは再度手を打ち合わせた

「うん、決めた！」

「お。決まったか。変のじやないのをお願いするぞ」

「任せて、自信あるから」「

満面の笑みをアルは浮かべている

見方によつてはイタズラを思いついた笑顔にも見えなくはないが

「で、どんななんなんだ」

内心不安になりながらの666号は尋ねた

「ワイス。ワイス・カオストーンって言つのはどう?」

「ワイス・カオストーン、か・・・意味はあるのか?」

「うん、ワイスは賢人つて意味なんだよ。賢者の石の賢者から取つたんだ。カオストーンは、カオスとストーンの組み合わせ。それで賢人の混沌石つて意味にしてみた」

「賢人の混沌石、ワイス・カオストーンか・・・・・これまた俺に似合わないご立派な名前だこと」

666号は苦笑を浮かべている。賢人なんて立派なものでもないの

に、といったところだらうか

「これから長」ときを生きることになるんだろうからや。いつかは名前負けしないときがくると思うよ」

「そうかねえ」

「そうだよ」

互いに笑顔を浮かべ、二人は話している。新しい名前を喜び合つているのだ

「さて、改めてと言つのも変だが。ワイルド・カオストーンだ。これから宜しく頼む、アルハザード王」

「アルでいいよ。宜しくねワイルド」

この瞬間から666号、いや、ワイルド・カオストーンの歴史は始まものがたりつた

プロローグ〇三（後書き）

死食經典義「今回で666号に怨前が付きました」

ワイズ「666号改めワイズ・カイストーンだ。ま、宜しく頼むわ」

死「アルハガードや監視の石などの設定は、俺独創のものなので」
了承ください」

ワ「文句があつたらビンビン言つてこご。相手してやつからよ」

死「喧嘩口調はやめてつー？」

ワ「知るか」

死「まだプロローグしかないですが、感想などもうべると嬉しいです。では、また次回会いましょう」

無印編プロローグ①（前書き）

死食經典義「遅くなりました。混沌の賢人、更新です」

ワイズ「おせえんだよ、マダオ！」

死「ひどーー？」

ワイズがアルと出合ったときからはるかな時間が流れた

ワイズは様々な世界を渡り歩き、知識を深め、力を手にしていった
そして彼は今、第97管理外世界・地球に5年ほど前から居を構えている

構えるまでは管理世界や観測世界などにいたこともあったのだが、「不便！」という同居人の意見と、管理局からなるべく離れる場所ということで地球に住むことになった

彼がいる場所は、地球は海鳴市の高級マンションの一室

その部屋の中は、なんと漫画やゲームで埋め尽くされていた

「むむつ……」の『螺旋丸』はなかなかいいな。おっと、こいつのPSYREN・サイレン・の『暴王の月』も使えそうじゃねえか（ねえねえ。ネギま！の『雷の斧』とか『千の雷』もいいと思つよ）

「ああ、いい案だな。よし、どつかの無人世界で練習してみつか

彼は地球は日本のアニメ、漫画文化から、実際に出来そう、使えるそ
うな技などを見つけ、己のものとしている

オタクの手前までなつてているのかもしけないが

「さて、いくか

(おーひ)

その声と共に魔法陣が現れ、部屋からワイズを転送。彼の姿は部屋からなくなつた

ワイズが転移を行つてから数時間、とある無人世界の建物の中に彼はいた

彼の周りは地面のあちこちに穴が空いていたり、建物の壁が粉々になつてたりしている

「うへん、こんなもんかねえ？」

（いい感じ、いい感じ　あ、そうだ　締めに、あれやつてよ　）

「あれつて・・・あれか？」

(うん)

「締めには一度いいな、じゃーやるか」

そう言い、ワイズは部屋の部屋の外に出て空を見上げる

何処までも続く雲一つない蒼い空。それはワイズが生まれた日の空と酷似していた

(ワイズ?)

「あ、どした?」

(ぼけつと空見上げてどうしたのかなって?)

「んや、何でもねーよ」

そう言い切り、ワイズは胸の前で両手首を合わせて手を開く構えを取りた

「さて、締めに派手にいくとじよ「そこまでだ!」……んだよ」

ワイズは構えを解いて空を見上げ、自分の言葉を遮った存在を見上げる

そこには、一人の男の子がいた

「これ以上の遺跡の破壊はストップしてもらおう!僕は時空管理局執務官、クロノ=ハラオウンだ。その権限でこれ以上の魔法使用の停止を命じる。速やかにデバイスを收める。詳しい事情を聞かせてもらおうか?」

「あ、つ!/?知るか!?!」

男の子、クロノの命令を一刀両断して、再び構えをとるワイズ

「くつ、従わないなら力ずくで聞いてもらおう!」

そんなクロノをワイズは一瞥し、構えた手の中に魔力を集中していく

「かあ～～・・・」

「ステインガースナイプ！」

クロノが魔法を放つ、その数は10。それらは全てワイスに命中する。しかし、その魔法はワイスにダメージを『与える』ことは出来ず、当たった瞬間に消えていった

「なつ！？」

「めえ～～・・・」

「（バリアが何かを張っているのか？）ならこれはどうだー！」

「はあ～～・・・」

ワイスは胸の前に構えていた両手を腰の位置まで移動させる。移動させた手と手の間には集束された魔力が渦巻いていた

それを危険だと認識したクロノは、再度魔法を放つ。その数は25に増えていた

しかし、それらの先ほどと同じようにたたった瞬間消えていった

「くつ！？」

「めえ～～・・・」

ワイスはそこでクロノに声をかけた

「おい、ガキ」

「餓鬼！？」

「一応手加減はしてやる」

「ふざけるな！ブレイズキャノン！…！」

〔Blaze Cannon〕

「警告はしたからな・・・」

クロノはそのまま砲撃を放つ。ワイスは慌てる様子もなく、その構えから放たれる技をクロノに抜けて解き放った

「波あつ……！」

ワイスの放った一撃は、クロノのブレイズキャノンをあっさりと飲み込んで消し去った

「そんな、馬鹿なつ・・・！？」

そして、威力を減少させることなくクロノへと到達する

「くつー・ラウンドシールドッ！…！」

〔Round Shield〕

ワイスの一撃が当たる直前に、防御魔法をクロノは発動する。が、

しかし、『かめはめ波』を防ぐには役不足だったのか、あっせりと破られた

「そんなつ・・・」

そんな台詞を残して、クロノは『かめはめ波』に飲み込まれ、爆発が起きて、爆発による煙がクロノを包み込んだ

「弱つちいな・・・」

ぼそつとワイズは呟いた。その呟きと同時にクロノが落下し、大地に衝突した。

(まだ若いんだし、しかたないと思つよ)

「ま、俺には関係ねーがな。さて、帰つて飯にすつか

(はい、ピザが食べたいです!)

「帰りに買つてくれ。たしか公園からが近かつたな。なに喰うか決めとけよ」

(はい)

ワイズの足元に魔法陣が浮かび上がり、ワイズを転送する

転送が終わり、暫くすると煙が晴れてくる。煙が晴れた先にはクロノが一人倒れている

「ぐう・・・」

クロノは痛む体をなんとか立ち上げ、ワイズ達の姿を探し始める

そんな彼の眼前に、通信画面が現れた

『クロノ』

「ああ・・・いえ、艦長」

『クロノ、戻つて来なさい。その状態だと戦闘も碌に出来ないでしょう』

「で、でも・・・」

『これは命令よ』

「・・・わかりました。帰還します」

任務を達成できなかつたためか、クロノの表情は厳しいものになつてゐる

そんなクロノの足元に転送用の魔法陣が浮かび、クロノを彼が所属する船・アースラへと転送が始まる

クロノの転送が完了すると、そこには穴の開いた地面と崩れた壁だけが物言わず、ただ静かに青い空を見つめていた

クロノとの戦闘のあと、ワイズは海鳴の公園に転移してきた

(さあ、ピザが私を待つてゐる。レッシ'ゴー！)

「今更だけどよ、『テリバリ』でもよかつたんじゃねえか？」

(『テリバリ』よりも、直接買いに行く方が好きなの！…)

「いや、実際に買つのは俺なんだが・・・・・ん？子供？」

ワイスは公園のベンチに座り俯いている一人の少女が目に入り、一端話を切り上げた

「わりいが、先にアレをどうにかしようと思つ。そろそろ暗くなる時間だつづーのに一人でいるのは危険だからな

ワイスは見つけた少女を見ながら言つた

(ワイスは本当に子供には優しいね)

「そーでもないだろ。普通だつて、普通」

ワイスは子供が座つているベンチに近づいていく。その少女は俯いて、しかも泣いていたため、ワイスが近づいてこることに全く気がついていない

彼がベンチに辿り着いて少女の横に座つても、少女は俯き泣いたままだった

「うううう・・・・・」

「おこ、嬢ちやん」

「ふえ？」

ワイスが話しかけられたことじで、少女は始めてワイスに気がついた

「じょつかんって、なのはの」となの？」

「ああ、周りにはほかに誰もいなこつーの。んで、ビースト泣いてたんだ？」

ワイスは優しく少女、なのはに聞いた

「あのね、お父さんかけがをしちゃって、じょうこんにこもうこんじてるの」

見ず知らずのワイスに素直に答えるなのは、ワイスは彼女の涙を拭きながら更に訊ねる

「ふむ、それで家族はお父さんの看病か？」

「・・・ひん、お母さんともおねえちゃんも、おみせがいそがしいの」

「モーか・・・」

「おこにちやんもいるナビ、ちゅうといわくて・・・でもなのははひとりでへいきなの」

子供特有の支離滅裂な話し方で話すなのは。ワイスはそんななのは

に優しく質問をする

「そのお兄さんはどんな風に怖いんだ？」

「……なにかおじつてるみたいなの」

「そうか。それでなのはちゃんは一人で公園にいたつーことか」

「うん……そうなの」

そう言いたなのはは俯いてしまった

(さて、ビーすっかねえ……)のままこの手を送つてもいいんだ
が……)

(ね、ワイヤズ。花火でも見せてあげたら? きっと喜ぶよ)

(おお、珍しいいアイティアを出すじゃねえか。魔法のコントロールは任せるぜ)

(珍しくは余計だよー)

ワイヤズはベンチから立ち上がり、なのはの前に移動ししゃがみこんだ

「なあ、なのはちゃん。花火は好きか」

「はなび?」

「や、空にビーンってなる、あの花火だ」

ワイズは右手に魔力を集める

「『サギタ・マギカ 魔法の射手・連弾・光の30矢』！」

集められた魔力を光の矢にして空に撃ち放つ

打ち上げられた光の矢は、ある程度の高さまで上がり、2個一組に分かれて互いにぶつかり合つ。そして魔力を弾けさせる

弾けた魔力は円状に広がり、光の花を空に作り出す。

弾け広がった魔力の光が薄暗くなつてきていた当たり一面を明るく照らし出す

「うわあ、きれいなの」

全ての光の矢が光の花に変わり、辺りが薄暗くなる。それでもなのは空を見上げて、先ほどの光景を思い浮かべている

ワイズはそんなんのはの横にしゃがみ込み、頭に手を載せる

「どうだ、気に入つたか」

「うん！とつてもきれいだつたの！」

「そつか、気に入つたのは何よりだ」

なのはの顔には先ほどまでの影はなく、年相応の少女の笑顔が戻つていた

「さて、そろそろ家に帰るぜ。送つてこつてやるよ」

「はいなの」

するとワイスはなのはの背に周り、彼女を持ち上げる

「いやいやー？」

突然のことになのはは驚くが、ワイスは気にせず、そのままなのはを持ち上げて肩車をした

「道案内よひしべー」

「あ・・・あっちなの」

突然肩車をされたことに驚いていたなのはだが、ワイスの言つていることを理解したようで道案内を始めた

（本当にワイスは子供に優しいって言つか、甘いね～）

（ハッカー）

「あの・・・」

「ん、どうした？？」

公園から出て暫くしたころ、なのはがワイスに話しかけた

「セツのひかりはなんだたの？」

「ああ、あれか。あれは、そだな。わかり易くゆーと、魔法だ」

「まほりへじやあ、えつと・・・」

何かを言おうとしているが何と言つてこいのか判らず、なほの言葉が止まった

ワイズは訝しげにいつもたが、自分の名前をお教えていなかつたことに気がつき、なほに名前を教えた

「おつと、名前教えてなかつたな。俺はワイズだ、ワイズ・カオストーン」

「あつがどうなの、ワイズさん。うんと、ワイズさんはまほりつかいなの？」

「やうだな、俺は魔法使いだ」

別段隠すことでもないの、おつと魔法使いだと叫ぶことをコトをイズは認める

「すいのーほんもののまほりつかいのーー」

「おつと、セツで余りはしゃぐな。落ちつぞ」

「あ、『めんなさい』なの。でもまよひくさーなのーー。」

魔法使ひに会えたことがよほど嬉しいのか、なほのテンションは

高い

「おかあさんやおねえちゃんにじまんすのー。」

「おつと、それは駄目だ」

そんなんのはにワイスはストップをかけた

「どうしてなの?」

「魔法使には普通は正体は隠してもんなんだ。なのはちやんて
教えたのは特別なんだよ」

「むー・・・わかったなの。なにしょとかるべやくべやくの」

「よし、こころだ」

田が落ちかけている道を、そんな話をしながら一人は歩いていった

「つこたのーーーなの」

「お、いいか」

なのはの案内で翠屋に到着したワイスとなのは

ワイスはなのはを肩車したまま、器用に店の扉を開けて中に入った

「あ、こらっしゃこませ・・・・あ、なのは!」

店に入ったワイスとなのはに大慌てで駆け寄つてくる女性がいた

「おかあさん、ただいまなのー。」

ワイスの肩から降りながらその女性、なのはの母親に言った

「もう、心配したんから・・・えっと、彼方は？」

なのはの母親は、なのはを抱き上げながら、ワイスに訪ねた。そ
の時は多少なりともワイスを警戒しているようにも感じられる

「あ、俺はワイス、ワイス・カオストーンだ。公園になのはちゃん
が一人でいたんでな、お節介だったかもしれないがここまで送らせ
てもらつた」

「あ、そうだつたんですか。すみません、どうも有難う御座います」

事情がわかり、警戒をといて礼をするなのはの母親

「それで、なのははちやんのお母さ」桃子です。高町桃子「・・・桃
子さん、じこつて喫茶店か?」

「ええ、喫茶店翠屋。私達の店ですよ」

「何か注文してもいいか?腹が減つててな

ワイスは苦笑を浮かべながら訪ねた。なのはと会つていなければ、
今頃はピザを食べていたのだから

「ええ、もちろん。エリザベスさん」

桃子は笑みを浮かべ、ワイヤーズを席に案内する

「注文が決まつたら呼んで下さいね」

「ああ」

メニュー表を見ているワイヤーズに、桃子はそういうカウンターへと戻つていった

「さて、何喰うかねえ」

「オムライスがおいしいの」

ワイヤーズの正面には、何故かなのはが座つていた

「……お母さんと一緒に行つたんじゃねえのか？」

「かたづけにちょっとじかんかかるから、ここでたべていきなさいつて」

「ん、そうか」

そつ言い、ワイヤーズは再びメニュー表に視線を移す

(ワイヤーズ……私も食べたい……)

「（今は我慢しろ。いきなりお前が出てきたら変だろーが）」

(「う・・・じゃあ、」)に書いてある持ち帰りのケーキを買つて
!)

「(オッケー オッケー) んじゃ、なのはちゃんお勧めのオムライス
にするか。おーい、注文いいか?」

「はーい、ただいま!」

カウンターの方から桃子とは別の声が聞こえ、その声の主が注文を
取りにやってきた

「あ、あなたがなのはを送つてくれたワイスさんですか。わたし、
なのはの姉の美由希です」

「お!。俺はワイス・カオストーンだ。んで、注文いいか?」

「あ、」めんなさい。では、」注文をどうぞ」

「オムライスとブレンドコーヒー。あと持ち帰りで、ガトーショコラ
とチーズケーキとミックスベリーのタルトを各2個づつ」

「なのはもオムライスなの」

ワイスと一緒にちゃつかりと自分の分も言つなのはに、ワイスと美
由希は苦笑を浮かべる。当の本人は何故笑われているのか判つてお
らず首を傾げているが

「(注文承りました。少々お待ちください」

美由希はカウンターの奥へと戻つていった。暫くすると奥の方から

玉子が焼けるいい香りがしてきた

「おお、いい香りだな」

「ほっぺたがおひるくらいおいしいな」

なのはは笑顔を浮かべ、オムライスがくるのを今か今かと待っていた
そんなんのはに、ワイズはふと氣になつたことを訊ねた

「なのはちゃん。なのはちゃんはお父さんの見舞いには行つてんのか？」

「あまりいけてないの・・・」

「ふむ、なら今度俺と一緒に行かねえか？大人と一緒になら心配」と
もねーだらうしよ

「あら、それならお願ひしちゃおうかしら」

「うおつー？」

ワイズの横に突然桃子が現れ、ワイズは背を仰け反らせた

(俺が気配に全く気がつけねえで、桃子さんは何モンだ！？)

「コレへらこは嗜みですよ」

「いやいや、そんな嗜みはねえって、つか人の考えを読み取るな！？」

?

「顔を見れば考へてることはわかりますよ」

「うう、『注文のオムライスとブレンンドコーヒーです。私達もお店が忙しくて、なかなかのはを連れて行けないんですよ。もし良かつたらなのはと一緒にお見舞いにいてもらえないでしょうか?』

「お、なのはちゃんのゆーとおり美味そうだな。見舞いの方はオッケーだ。明日にでも一緒に行くぜ」

「ふふ、ありがとう御座います」

「つーわけで、なのはちゃん。明日昼飯喰つたら公園のあのベンチに集合な」

「わかつたなのー。ワイスさんありがとうなのー」

父親の見舞いにこけるのが嬉しいのか、なのはは満面の笑みを浮かべている

そんなんのはの様子に、ワイスと桃子にも笑顔が浮かんでいた

「さて、冷める前に食べるとすつか

「いただきますなー。」

「パーヒーのお替りがあつたら言ひてくださいね」

これが、混沌の賢人とエースオブエースと呼ばれる」とことなる」と
になる高町なのはの出会いの日のお話

(ケーキケー キケー キケー キケー キイイイイイイイイイイイイイ)

「(帰つたら食わせてやるから、黙れつ…つせえー…)

無印編プロローグ①（後書き）

死食經典義「はい、と言つわけで無印編のプロローグでした」

ワイズ「おいおい……時間が飛びすぎだらおがよ」

死「あの後も書いてると、プロローグが10くらいまで行っちゃうのよ。まあ、その部分は外伝みたいな形で出す予定だから、安心しておけ」

ワイズ「ま、そのままお蔵入りでも俺は構わねえけどよ」

死「おいおい……」

ワイズ「おっと、読者に連絡だ。気が向いたら感想を書いてくれや。俺に稽古付けてくれるやつも大歓迎だぜ」

死「まあ、お前みたいなやつと戦いたいって人はそういうだらうけどな」

ワイズ「てめえは吹っ飛んだけつ……『サギタ・マギカ魔法の射手火の三矢』……！」

炎華崩拳

死「また次回会いましょ~~~~~（キラーン）」

無印編プロローグ〇二（前書き）

死食經典義「久々の更新で御座いますです」

ワイズ「こっちは不定期更新だったか？」

死「いやー、もう一つの方もあるからねえ。なかなか手が回らない
のよ」

ワイズ「何つたけかねえ。ああ、そーだ。一頭を追つるのは一頭
も得ず、だ」

ワイズとなのはが出合つた畠田の畠前。ワイズは喫茶翠屋に来ていた
「どもー」

「あら、ワイズさん？ 確か約束はお畠廻りでしたよね？」

桃子がワイズに気がつき、畠前に来たことを聞いた

「ああ、畠飯作るんがめんバーでな。悪いけどなんか頼むわ」

「サンデイッチで良ければ直ぐ出来ますよ」

「えじや、それで」

少し待つててくださいねと言い、桃子はカウンターに下がつた。それと入れ替わりで、なのはがやつてきた

「ワイズさん。ここのまほなの」

「よし。俺の飯終わつたら約束通り、お父さんの見舞いに行くか」

「はいなの」

ワイズはやつてきたなのはとお父さんが元気になつたら何をしたい
かなど、とめどない話を始めた

そんなワイズを一人の青年、なのはの兄である恭也がカウンターの

影から見ていた

・・・いや睨み付けていたといったほうが正しいかもしない。その視線には微弱だが殺気が込められていた

ワイズはその視線を完全に無視し、なのはと喋つている

そんなワイズに興味が無くなつたのか、恭也はカウンターの奥へと戻つていつた

(ねえ、ワイズ。いいの？無視してたけど？)

(ふん。周りが見えていないド二流の阿呆なんぞは放つておけ)

ワイズは昼食のサンドイッチが来るまで、そのままなのはと喋り続けた

昼食を食べ終わったワイズは、なのはの案内で彼の父親の高町士郎がいる病室に来ていた

「おとうさん、おみまいにきたの」

しかし士郎は意識が無いのか反応しない。全身に包帯が巻かれ、点滴などのチューブが付けられており、一目見ただけで重病人と判る

「おとうさん、はやくおきてなの・・・」

そんな状態の父親を見たためか、なのはの目には涙が溜まって来て

いた

ワイズは、そんななのはの頭を撫でながら囁つ

「なのはちゃん。んな顔してつと、お父さん元氣が行かねえぞ。
ほら、笑顔だ、笑え」

「ワイズさん……うん、おとうさんいづみさんをあげるのー。」

なのははさう言つながら、服の袖で涙を拭く

「ま、取り合えず顔洗つてこい。ひでえ顔になつてつからな」

「は」「やー!？」

ワイズに言われ、なのはは自分のをぺたぺたと触った

「か、かおあらつてくるなのーーー」

ワイズに泣き顔を見られたせいかどうかはわからないが、顔を赤く
しながらなのはは顔を洗いに行つた

「・・・せひと。この状態、お前なら何処まで直せる?」

ワイズと土郎しかない病室で、ワイズは誰かに話しかける

(やうね。一回の回復魔法でなら会話もある程度動けるといつまで
は出来るかな。それと一緒に自己回復能力も強化させるよ)

「OKOK。ならひとつとちまおつ

(でもさ。相変わらず、子供には甘いよね~)

「無駄に時間かけてつとなのはちゃんが戻つてくつかり、ちやつちやとやるわ」

(はいはーい)

ワイズは左手で自分の額を掴んだ

「エンパイ
嫉妬、発動」

その言葉を言つと同時に、ワイズの体が仄かに光り、その姿が変わっていく

白銀の髪は黒く染まり、同じく瞳の色も銀から黒へと変わつていく。
そして一番の変化はその体形が男性から女性に変わつたことである

ワイズの全身が完全に別人へと変化し終わると、光も消えていった

「んじゃ、コントロールは任せる」

「はーい。それじゃこくよ~」

女性へと変化したワイズの口から2種類の声が紡がれた。1つは先ほどまでと同じワイズの声。もう一つは女性の声で、その口調もワイズのものとは異なつていた

「優しき光よ。彼の者を癒したまえ」

詠唱と共に右手に光が集まり、球を形作る。その光球はワイスの右手から離れ、士郎の上へと移動した

キイン、と高い音が病室に響き、光球が弾けた

その響きと同時に士郎の体を白い光が包み込んだ

その白い光りは一〇秒足らずで消えていった

「これでよし」

「悪いな。どうも回復系統は苦手でよ」

「気にしない。適材適所つていうじやん」

そのとき、少し遠くから誰かが駆けてくる音が聞こえてきた

「おっと、なのほりやんが帰つてくれんな。あとで翠屋でケーキ買っておく」

「楽しみにしてるよ」

ワイスは先ほどとは違い、今度は右手で自分の額を掴む

「嫉妬^{ハナクヤ}、解除^{ハラフ}」

その言葉を発した途端、ワイスの姿は一瞬で元の姿に戻った

ワイスの姿が戻ったと同時に、なのはが病室に戻ってきた

「ワーズさん、ただいまなの」

顔を洗つたあと、走つて戻つてきたのか、多少息が切れている

「おかえり。なのはちゃん（ギリギリ今は見られてねえみたいだ
な）」

（見られても別にいいんじゃない？ もう自分が魔法を使えるって話
してみんだし）

「（説明がめんどーなんだよ）」

「へ、ううん…・・・」

なのはの声に反応したのか、タイミング良く士郎が田を覚ました

「おとづれっ！…？？」

「な、なのは？それ…は…・・・？」

田が覚めると田の前にはなのはがいて、見覚えの無い部屋にいた為
に士郎は状況が掴めていない様子である

「なのははちゃん。お父さんの田が覚めたことを、じいの医者せんせに教え
てきいやんな」

「はこなの一いつでこつてくるの…」

ワーズに頼まれたなのはは、全速力で病室から駆け出していった

「廊下は走んな、つてもついねえや」

「ええっと、君は一体……？それに……？」

「俺はワイス・カオストーン。なのはちゃんとは最近知り合った。んで、ここは病院の病室だ。なんで此処にあんたがいるかまでは知らねえよ」

ワイスはなのはと此処に来た理由も土郎に説明した
魔法を使って怪我を癒したことも含めてだ

「魔法か……俄かには信じられないが……君の田は嘘を言つて
はいなこよつだ。信じじるよ」

「おじおこ……いーのか。そんなあつさり信じて」

「これでも人を見る田には自身があるからね」

ワイスの田をじっと見つめて土郎は言った。そんな土郎にワイスは思わず溜息を出しちゃった

「はあ、せいでですか。あ、魔法のことは秘密にしておいてくれな。
いつもこうあるとあるんでよ」

「うん。わかったよ」

「怪我の方は1週間もすれば完治するだろ。直つたらよ、なのはま
やんのお兄ちゃんとやらをいつひとつ絞つてくれな」

「恭也をかい？なんでまた？」

「1、妹であるなのはちゃんを放りっぱなしにした。2、この俺を殺氣の籠つた視線で見てきた。3、周りの見えてねえドリ流には再教育が必要」

毎に感じた恭也の視線のことと言ひてこりのだりつ。無視はしていが、根に持つていたらしく

「セレニまで酷いのかー？」

「さあ？俺は今日初めてアレを認識したんでな。なのはちゃんに聞いた方が早えよ」

「そりか・・・どんな感じなのかはなのはから聞くよ」

「そーしてくれ。つと、医者せんせが来た見てえだな。俺はここいらでお暇じとまさせてもらひうぜ。暫くしたら桃子さんなり誰か来んだから、あとは家族で仲良くやんな」

ワイスはドアの方に振り向くのと同時にドアが開き、なのはと医者が入ってきた

医者はすぐに士郎を診始めた

「さて、俺は帰るぜ。この後人と会う用事があるんでね

「・・・うん」

ワイスが帰ると言った途端、なのはの顔に影が差し込んだ

「そう暗い顔すんなつての。明日また翠屋に行つからよ

「…！ うん、まつてるな」

なのはの顔に笑顔が戻つたのを確認したワイズは、病室から出て行つた

なのはと別れてから1時間ほどたつたころ、ワイズは海鳴臨海公園にいた

「さて、そろそろの筈なんだが・・・？」

ワイズの眩きに、タイミングを合わせたように地面に魔法陣が浮かび上がつた

魔法陣の光が収まるごとに、そこには6人の人影が在つた

「よお、お疲れさん」

その6人にワイズは労いの言葉をかけた

「うん、ただいま」

と、小柄なストレートの金髪の女性

「出迎えありがと」

「さあは先ほどの女性と同じ金髪だが、ウエーブがかかっている

「只今戻りました」

礼儀正しいのは青いショートヘアの女性

「おー、戻ったぜ」

ラフに返したのは黒のロングヘアをポニーテールにしている女性

「・・・ただいま」

ぼやつと返したのは、見た目が小学生くらいでライトグリーンのセミロングの女子

「別段疲れではないわよ」

素っ気無く返したのは白髪のショートヘアの女性

各自が思ひ思ひの言葉でワイヤーに返していく

全員女性とこいつとこいつの際置こいつ

「んじゃ、暫くの間は休息だ。姫川ちゃんと休めよ」

すると金髪の女性一人がワイヤーの腕に白いの腕を絡め、体を密着させた

「久しぶりのワイヤーの匂いだ」

「頑張つたご褒美。もちろんくれるわよね」

「・・・俺は休めつーたんだが?」

その二人の行動に、ワイスは思わず溜息をこぼす

「ん?」

後ろから引っ張られるのを感じ、首をまわしワイスは後ろを見る
まわした視線の先には、ライトグリーンの髪の女の子と白髪の女性
が服の裾を掴んでいるのが映った

「・・・わたしも、ご褒美ほしい」

「わ、私は別にご褒美なんて・・・」

なら何故掴むのだろうか

「いらねえのか?」

「うう・・・欲しい・・・」

青い髪の女性と黒い髪の女性は言葉には出していないが、視線が自
分も欲しいと訴えているのがわかる

「あー・・・わかったわかった、好きなもんやつから。取り合えず
場所、移動しようや」

「・・・はい」

6人の女性を引き連れて、ワイズは臨海公園を後にした

ワイズが士郎に治癒魔法をかけてから1週間後、士郎は無事退院し、喫茶翠屋に戻ることが出来た

士郎の回復速度に医師達は驚いていたが、魔法で直しましたといつても到底信じないだろう

何はともあれ、士郎は家族の元に戻ることが出来た

そんな彼は、ワイズに御礼をしたいということで、彼を翠屋に呼んでいた

「で、士郎さん？ そこなド三流は何故に俺に睨みをきかせてんだ？」

現在進行形でワイズは恭也に睨まれているのだ。彼が翠屋についてからずっととある

「ははは・・・恭也を叩きなおした時に、君の事を話してしまってね。どうも君のことが個人的に気に入らないみたいだよ」

「・・・・それは叩きなおしたって言わねえんじゃねーのか、おー」

全く持つてその通りである

ワイスは溜息をいりほしつつ、恭也の方を向く

「おこ、やいじのデニ流」

「それは、誰に言つて いるんだー！」

いきなり話しかけられたことに驚きつつも、恭也はワイズに切り返す

「てめえ以外いねえだろーがよ、阿呆。言いたいことがあるならはつきり言いやがれ。氣色悪い視線向けられたままじゃ、美味しい茶も不味くなるつてもんよ」

「くつ・・・いいだろ? 正直に言おう。お前が気に食わない。少々相手をしてもらおう」

「いいねえいいねえ。その無駄にあるプライド、へし折つてやんよ」

恭也の後ろをワイズは追つていき、道場へと入つていった

道場に入ると、恭也がワイスに木刀を投げて渡す

審判はさういひ士郎がせぬばかりだ

「すまないね、ワイズ君」

士郎がワインに謝罪の言葉告げた

「気にすんなって。それよりもだ・・・・・いいんか、なのね
やんじこいても」

ワイスは土郎の後ろに座っているのはをちらりと見ながら聞いた

「危ないとと思つたら止めるから、大丈夫だよ」

「そつかい。んじや、頼むわ」

ワイスはそれだけを言い、恭也に向かい直した

「始める前に、互いに挨拶を」

「・・・・・ 永久不動八門一派・御神真刀流小太刀一刀術、高町
恭也・・・」

恭也は父に言われたためか、渋々といった感じで名乗りをした

「あー・・・うん。我流なんちゃって剣術、ワイス・カオストーン
つてどこかね」

「・・・ふざけているのか」

「うん」や。我流で名前ねえからよ、適当に言つただけだ」

世間一般では、それを巫山戯でいるといふのだが

「そ、土郎さん。合図よしへへ」

「互いに開始線まで・・・・・始め!」

土郎の合図と共に、恭也の姿が消える。直後、ワイスが地面と垂直に吹き飛んだ

「ワイズさん！？」

「奥義之弐『虎乱』」

ワイズがいた場所には、今は恭也が立っていた

開始令図と共に『神速』で突撃し、一刀で放つ斬撃の技、奥義之弐『虎乱』をワイズに当たようだ

「！」の程度「あーべそ。ちょっと痛かったぞ」なに…？

あっせりと吹き飛んだワイズを一瞥していた恭也だったが、何事も無かつたかのように立ち上がったワイズを見て、その顔に驚愕を浮かばせた

「いやー、思ってたより速えし威力もあったからよ、ちょっと驚いたぜ」

「『弐』たえは確かにあつた……なのに、何事も無かつたように立ち上がるなんて……！」

立ち上がったワイズは、木刀を2度3度振り、恭也の前に移動した

「ほれ、もつと打ち込んでこよ、ドミ流」

「なら、望み通りにしてやる……」

ワイズの安い挑発に恭也は乗った

再び神速を使い、その姿が消える。そして再度、ワイスが5メートルほど吹き飛んだ

「ワイスさんっ！？？？」だいじょうぶなの！？」

「奥義之陸『難旋』！今度こそ確実に入つた！！」

奥義之陸『難旋』は抜刀術から始まる4連撃。神速もあわせて使つたものは、同じ『神速』を使うもの以外には見切ることは不可能を言われている技だ

言われているのだが・・・

「ふん。コレで終わりか？」

ワイスは先ほどと同じように、何事も無かつたかのように再び立ち上がった

「んじゃ、今度はいつちが行くぜっ！」

「つーー！」

その台詞に、すぐさま恭也は反応したが、それよりもワイスの行動の方が早かった

一瞬のうちに恭也の懷に潜り込み、木刀を振るつ

恭也はその攻撃を全て防いだが、その顔には再び驚愕が浮かんでいた

審判をしていた土郎の顔も同じく、驚愕が浮かんでいた

「なんで・・・なんでお前が『薙旋』を使える！？」

「なんでも、わざわざお前がやつたのを、そんままやつて見ただけだつづーの。見よう見まねだから、防がれちつたけどよ」

「なつ、見よう見まね！？」

そつ、ワイスは見よう見まねで『薙旋』を使っていた

だが、先ほど恭也は使った『薙旋』は『神速』を組み合させて使用していたものだ

つまりは、『神速中の薙旋をワイスは見ていた』と言つてになる

「『神速』を使っている俺の動きが見えていた・・・！」

「俺も似たよいつこと出来つからな。そして驚くことじやねえだろ」

ワイスは恭也に背を向けながら話し続ける

「さつきてめえが使つたの以外にも、『縮地』や『瞬動』、『超集中』なんてもんもあるんだよ。それらを使い合わせれば、あんなん簡単に見えるつーの」

ワイスは簡単と言つが、使い合わせることは簡単なんでものではない。むしろその真逆、ほぼ不可能といえる

その使い合せが出来るのは、不老不死で無茶無謀が可能なワイス
くらいただ

「わい、お喋りは終わりだ」

ワイスは恭也を左肩越しに見ながらやつて言つた

「てめえの小切手を教えてやるよ」

「ふわー」「手加減はしてやつたぞ、ひやんと防衛しようよーん」つー

ー

恭也はワイスの腰の間に耳を貸す、背を向けていたワイスに打ち込もうとした

だが、背を向けているのにもかかわらず、隙が見つけられずに攻められないでいた

そんな恭也を左肩越しに見ながら、ワイスは初めて構えをとった

恭也に背を向けているのは変わらず、木刀を自身の皿の高さまで持つていま、皿と水平に構える

その途端、辺りの空気が冷たくなるような感覚が道場に満ちた

静寂が道場を侵食していく。音も空氣も時間さえも止まっているかのような錯覚に陥るほどどの静寂

「へつ・・・

その静寂の中、ワイス以外の誰かが唾を飲み込んだ音が静かに響いた

それを合図に「ワイスは恭也へと踏み込んだ

「『秘剣』・・・」

恭也はワイスが何を行うのか、検討も付いていない。だが、剣士としての感が彼に防御の行動を取らせた

「――この一撃を防いでカウンターを決める!」

だが、恭也のこの考えは、ワイスの一撃の前に砕け散る

「『燕返し』！」

ワイスが放つたのは上段からの強烈な唐竹割り

恭やは両手の木刀を交差させ、その一撃を受け止めた

「――手が痺れる・・・だが、ここでカウンターを――」

恭やは先ほどの考え方通り、カウンターを放とうと木刀を返す

が、その瞬間、胴と逆胴の左右からの打ち込みが恭也を捉えた

「なつ・・・！？？」

だが恭也も御神流の剣士。『神速』を使い、打ち込みを後ろに下がり避けようと動いたが、完全には叶わなかつた

「ぐつ！？」「

胴の打ち込みこそ避けたが、逆胴の一撃が左腕に直撃した

「む・・・完全に入つてねーか。あの一瞬で『神速』を使って後ろに下がるつーのは良い判断だ」

打ち込んだ状態のまま、恭也の一瞬の行動をワイスは褒めた

「でもよ、この試合中その左腕は使えねえぜ」

骨こじれ折れていなが、ワイスの一撃は恭也の左腕に木刀を持てないほどのダメージを与えていた

「まだだ！まだ右腕が残っている！－！」

恭也は右腕をワイスに向け、まだ戦えることを告げた

「なら次で締めだ」

未だ戦う気でいる恭也に、ワイスは抜刀の構えを取ることで答えた

「まあ、手加減はしてやる。しつかりと防御しろよ」

ワイスが構えたことで、道場の空気が再び冷える感覚が満ちる

今度は先ほど違い、誰かが睡を飲み込むことはなく、1秒、また1秒と時間が流れていく

二人が睨み合い始めてから1分が過ぎた時、ワイスが動いた

「飛天御剣流奥義！『天翔龍閃』！！！」

あまかけるじゅうのひりめき

ワイスが抜刀の一撃を振るう

対する恭也は『神速』を使い、その攻撃範囲から逃れようとした
しかし、その一振りは恭也が『神速』を使っていてもなお、高速で
振るわれていた

- - - こいつも神速みたいな技を使つてゐるのか！？

恭也はワイスの一撃をギリギリのところで交わすことに成功した
先ほどと同じように別方向からの攻撃も予想していたが、抜刀以外
の攻撃は無かつた

- - - カウンターを決めるなら今、なにつ！？

カウンターを決める為に動こうとした恭也だが、体が固定されたよ
うに動くことが出来なかつた

さらに恭也は、自分の体がワイスに引き寄せられていることに気が
つき、本日何度目かの驚きを覚えていた

そして、引き寄せられた先には振りぬいたまま1回転し、再度打ち
込みを行つワイスの姿と自分の体に吸い込まれるように入つてくる
木刀が視界に写つた

そして、そのままワイスの一撃は恭也の体に打ち込まれた

「勝者、ワイズ・カオストーン！」

士郎がワイズの勝ちを告げる

試合の勝者であるワイズは、当たり前だといつや表情で士郎を見ていた

一方、敗者となつた恭也は

「お、おにいちゃん・・・だいじょうぶなの？」

『天翔龍閃』が直撃したために、意識が綺麗に刈り取られていた

『天翔龍閃』は2撃目の方が威力上がつからな。暫くは起きねえよ

「そうそう。あの技、『天翔龍閃』だったかな。飛天御剣流つて言つてたけど、最初には我流つて言つてなかつたかい？」

そう、ワイズは試合開始の名乗りの際、我流なんちゃつて剣術とはつきりと言つている

「ああ、それか」

するとワイズは何処からとも無く数冊の本を取り出した

「アレはこいつから取つた技なんだよ」

「・・・一体どこから取り出したんだい？」

「企業秘密だ」

士郎の問にはぱりと切り捨てられた

なのははワイスの持つている本をじつと見つめ、一言

「まんが？」

「おう、『天翔龍閃』はじの『るるぶ』『剣心』で出てくる技で、燕返しは二つの『F a t e / s t a y n i g h t』で出てきた技だぜ。知りたかったら読むんだな」

そう言い、ワイスは更に本を何処からとも無く取り出して、士郎となのはの前に積み上げていく

「本当に何処から出したんだい？」

「それは「きざゅうひみつの？」・・・・俺の台詞取るなや、なのはちゃん・・・つてもう読んでるし！？」

なのははワイスが出した本を読みながら突っ込んだようだ

未だ恭也が起きない中、なんともほのぼのとしているものだ

その後、何だかんだありながらも、ワイスは高町家と仲良くなり、なのはにとつてのお兄ちゃん的立場となつた

まあ、それが原因で、恭也と度々試合をすることになるのだが、それはまた別の機会で

そして時は緩やかにその流れを進めていく・・・

高町なのは、聖祥大学付属小学校の3年生の4月

その運命という名の流れが、大きくうねりを上げながら急速に流れ
を変える瞬間が近づいていた

無印編プロローグ②（後書き）

死食經典義「はい。今回でプロローグはお終い！次回からは無印編本編になります！！」

ワイス「おい、俺が変幻したやつと、途中で出てきた6人。あれはどうすんだ？」

死「彼女らはね・・・」

ワイス「は？」

死「ちょっとした顔見世です。暫くは出できません」

ワイス「・・・・」

死「では、最後にお礼を。クロ助様、えんづい様、感想有難う御座います。感謝の極みです」

ワイス「極みか・・・よし、それにすつか」

死「にゅ？」

ワイス「顔見世だけじゃなく、ちゃんと書けや。ド三流！ 一重の極み、ア」――――――――――――

死「ちょ、それ禁ら、ビルゴツ――??」

ワイス「ふう・・・作者を続投不能にしちまつたんで、俺が代わり

に・・・また次回で会ね'やー。」

無印編第1話（前書き）

死食經典義「なんとか11月中に更新できた――――――！」

ワーズ「遅えんだよ。もつとキリキリ更新しやがれ」

死「努力します・・・」

地球は海鳴

黄昏時と言われる時間帯。もう数分で逢魔時おとまがどきと呼ばれる程に太陽が落ち、大地が紅く染まっている

周囲が樹木で蔽われ、今だ自然を残す中に通る道に一人の少年がいた

「ハア・・・ハア・・・・・・」

その少年はマントを羽織つていて判り難いが、少年は腕から血を流していた

キーンというハウリング音にも似た音が響き渡る

黄色っぽい髪の色をした少年はその音に反応し、横に振り向いた

そこには赤く目を光らせる黒い物体・・・いや、黒い生物のようないものがいた

少年は腰のポーチから小さな赤い珠を取り出し正面に掲げた

するどいだらう。赤い珠は光だし、珠を中心に黄緑色の大きな丸の中にさらに丸を描き出した。円と円の間には見たことのない文字が現れた

さらに内円の中につつの正方形が現れ、それぞれが左右別々に回り始める。その2つの正方形の中に各辺の中点と接するように始めに

現れた2つの円と同じものが描かれた

その筋の人を見れば、魔方陣だ！と言つのだろうが、この場にいるのは少年と黒い生物だけである

それを見た黒い生物は少年に向け走り出した

「くっ・・・妙なる響き、光となれ！赦されざる者を封印の輪に！」

少年が何かを唱え終えたのと同時に、黒い生物は飛び上がり少年に襲いかかつた

「ジユエルシード、封印！！！」

黒い生物は走った勢いを弱めることなく赤い珠が描いた魔方陣に衝突

魔方陣は強く光りだし、その光は周囲を明るく照らした

その光と共に衝撃波もでていたのか、黒い生物は吹き飛ばされた

黒い生物はダメージを負ったのか、体を地面に滑らせるようにして少年の前から逃げていった

それを見た少年は膝をついた

「逃がし・・・・・・ちゃつた・・・・・・追つかけ・・・・
なく・・・・・・ちや・・・・・・・・・」

その言葉とは裏腹に、体力の限界だったのだろう、少年はそのまま

地面に倒れこんでしまった

「誰か・・・・・僕の声を聞いて・・・・・・・・・力を貸して・
・・・・・魔法の・・・・・・・・・力を・・・・・・・・・」

そう呟くと少年の体が光りだす

光が収まるごと、少年は傷付いたフェレットの姿になった。そして、そのまま側に、少年が手にしていた赤い珠が落ちた

その頃、Iの話の主人公であるワイスはどうと・・・・

「うはははははははは――――――――――――コレで100連勝つ
――――――――――！」

海鳴にあるゲームセンターにてGVGEXVSをやっていた。使用機体はスサノオ。挑戦者を全員格闘で滅多切りにしていたりする

「うははははは！快調快調、次の挑戦者は誰だ――――――！」

そんなワイスに声が届いた。黒い生物と戦っていた少年の声だ

（力を貸して・・・・・魔法の・・・・・・・・・力を・・・・・・・・・）

少年の願い。ワイスなら造作も無く叶えられる程度の願い・・・・
・なのだが、現実は厳しいものであり

（うせーーーうちは今急が楽しことこなんだよつーーー）

(そーだそーだ！…いいとこなんだー…)

なんとも酷い話である

世界は何が起つとも何時も通りに太陽を昇らせる

蒼く澄み渡る空、蒼く輝く海、ビルや民家が立ち並ぶ市街地

そんな市街地のとある家にある部屋から音楽が鳴り響いた

音楽の発信源は1機の携帯電話

その持ち主は携帯を止めた手を伸ばすが、誤ってベットから落としてしまった。が、すぐに布団から手が伸び携帯を止めて拾った携帯の持ち主が布団から起き上がり、寝ぼけ眼をこすりながら起床した

ブラウンの髪を肩を少し超えるくらいまで伸ばしたセミロングの少女

彼女の名前は高町なのは。この物語のヒロインの一人にあたる少女である

「なんか、変な夢みちゃった」

窓の外では雀が鳴き、その窓から差し込む朝の光を見たなのは可愛く、ん~と伸びをした

彼女は聖祥付属の制服に着替え、洗面所で髪を結つてツインテールにした

「おせよ～」

リビングに駆け足しで入った彼女はキッチンに立つのはと回じ髪の色の女性、母・桃子の所まで行つた

「おはよ～」

椅子に座り新聞を読んでいた土郎は新聞を下に置き、挨拶を返した

「おはよう、なのは」

「はい、これお願ひね」

桃子は数個のコップを乗せたお盆をなのはに渡す

「はい」

土郎は挨拶をしたのに振り向いてくれないなのはを見て、テーブルに『』を書いている

が、なのはがテーブルにコップを持つてみると、即座に持ち直した
「ちやんと一人で起きられたなあ～偉いぞ」

テーブルにコップを並べるのはを手招きし、その頭を撫でだした

親馬鹿？

「朝、飯もつすぐ出来るからね

「は～い。あれ？お兄ちやんとお姉ちやんは？」

なのはは士郎に頭を撫でられながら、兄達がいないことを尋ねた

「ああ、道場にいるんじゃないかな？」

「呼んでくれるね」

「フンシ・・・えい！」

高町家にある道場では美由希が木刀で素振りをしていて、恭也が倒れていた

その時に道場の扉が開いて、なのはが顔を出した

「お兄ちやん、お姉ちやんおはよ～朝ご飯だよ・・・・・・なんで倒れてるの、お兄ちやん？」

「・・・おはよう」

「あ～、なのは。おはよう」

「おはよう、なのはおはよう」

「あ、ワイズわ。おはようなのー。」

倒れている恭也の側にワイズが立っていた。どうやら彼は恭也と模擬戦をして、打ちのめしたところだったらしい

しかし何故彼が模擬戦をしていたのか

理由は恭也がワイスに負けて暫く経たった頃に遡る

ワイスに負けた恭也は、その後もちょくちょくワイスに模擬戦を挑んでいたのだ。ずっと負け通しではあるが・・・

その模擬戦は朝だつたり夜だつたりと時間帯は一定しておらず、今日は偶々朝にやっていたようである

なのはは木刀を持って素振りをする美由希にタオルを投げ渡す

「ありがと」

そしてなのははワイスの所まで行き、直接タオルを手渡した。その後に恭也の顔に乗せた。

なのはがいたずらをするようになつたのは、ワイスの影響である。

恭也は「俺は死んでない！」と叫びながらタオルを取つた

なのはの一人に対する扱いが違うが、なのは曰く「ワイスさんは特別なの！」のこと

本人に自覚はないかもしれないが、恋心がそうさせているのかもしれない

「ありがとな、なのはちゃん。さて、負け犬、なのはちゃんが来たから今回はココまでだ」

「呼び方に悪意を感じるが……じゃあ美由希、今朝は」
まで

「はい、じゃあ続ければ学校から帰つてからね？」

「つて、ことだ。なのはちゃん、朝飯食いに行くぞ」

「はーー」

恭也以外の3人は道場から出たが、恭也は一人道場で倒れたままだ

「う・・・動けん・・・・・・」

思つていたよりもワイスとの模擬戦のダメージが大きかつたようだ

「ん~ 今朝も美味しいなあ。特にこのスクランブルエッグが」

「本当っ?トッピングのトマトとチーズ、それからバジルが隠し味
なの~」

「みんな、あれだぞ。こんな料理上手なお母さんを持つて幸せなん
だから分かってるのか?」

家族5人+ワイスが食卓を囲み仲良さそうに話している。恭也はなん
とか戻つてこれたようだ

ちなみに席順は士郎の隣に桃子。その反対側の真ん中に恭也、その
左側に美由希、右側にワイスで、ワイスの膝の上になのはが座つて

いる

ワイズが模擬戦をやつた後は、大体高町家で食事を取つてゐる。そのたび、なのははワイズの膝の上に座るようになつてゐた。用は甘えてゐるのである

最初のうちは恭也がワイズに文句を言つてゐたのだが、なのはの「そんなお兄ちゃん、きらい！！」発言で泣く泣く引き下がつたといつ

シスコンは妹には勝てないようである

「んもう分かつてゐよ。ね、なのは？」

「うん……」

「あ～ん、もうやだあ～あなたつたら フフフ」

「ん～？」

「「アハハハ」」

いまだ新婚気分バリバリの会話をする高町夫妻。見た目もさうだが、本当にいろんな意味で若い夫婦である

「美由希、リボンが曲がつてゐる」

「えつ？本当？」

「ほり、貸して見ろ」

恭也は美由希の制服のリボンが曲がっていることに気づき、その修正のために手を伸ばして直し始めた

「…………いいか、なのはちゃん。こんな風に言つて胸タツチをする気なんだ」

その様子を見ていたワイズはることないことをなのはに吹き込んでいた

「…………お兄ちゃん不潔なの…」

「そんなこと、誰がするか！…」

ワイズがいるだけで会話が盛り上がる、とは高町夫妻談。いじられる対象の恭也からすればいい迷惑である

「おはようございま～す」

スクールバスに乗ったなのははこれまた元気に挨拶をした

「なのはちゃん！…」

そんなんのはに声をかけてきたのは、彼女の友人のアリサ・バニン
グスと月村すずかの二人

「あつ？」

「なのは～」ひひひひひ

2人は一番奥の椅子に座りながら手を振っていた

「すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよう」

「おはよー、なのはちゃん」

アリサは少し遅れてなのはの座るペースを追加する

「おはよー」

席に座ったなのは、「アリサが話しかけた

「ねえ、なのは。明日とかワイズは暇かな?」この前のリベンジしたいんだけど

この「人がワイズのこと」を知っているのは、なのはが紹介した為である

その際、ワイズが部屋でゲームでもと言ったのが始まりで、ワイズとアリサはゲーム仲間になっていた

ワイズの部屋にはありとあらゆるゲームが揃っていたため、アリサは興味を持ったゲームでワイズに挑戦。負けてはまた挑戦の繰り返しの最中である

「どうだろ?ワイズさん、たまに連絡つかないことがあるし……」

・「なことなら今日の朝、聞いておけばよかつたかな」

「別にいいわよ。とりあえず連絡ついたら、教えてくれればいいし」

「うふ

場所は変わつて私立聖祥大付属小学校

「この前みんなに調べてもうつた通りこの町には沢山のお店がありましたね」

黒板に簡単な町の地図を書きながら教えている優しそうな女性の先生

なのはとすすかはその話をしつかりと聞いている

が、アリサは暇なのかノートに何かを書いている

授業の内容を書いている。のではなく、N N N N N や N N N N N
横 N C C やら英字や記号が書かれていた

恐らくはゲームでのワイヤーズ用の何かを考えているのだね。・
授業はいいのだね？

昼休みになりなのは達は屋上でお弁当を食べていた

「将来かあー・・・アリサちゃんとすすかちゃんはもう結構決まつ
てこるんだよね？」

なのはは先ほどの授業の終わりに先生が言つていた将来の仕事について考えていた

「ウチは、お父さんもお母さんも会社経営だし、一般勉強してちゃんと後を継がなきや・・・ぐらいだけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなって思つてゐるけど」

「そつか・・・・・・2人共凄いよね~」

小学3年生の会話ぽくない会話をする3人

もしワライズがこの場にいたら、なんと言ひだらうか?

「でもなのはは喫茶翠屋の2代田じやないの?」

「うん・・・・・・それも将来のビジョンの一つではあるんだけど・・やりたい」とは何かあるよつた氣もするんだけど、まだそれがなんなかはつきりしないんだ」

なのはは少し落ち込みながら話を続けた。といふか、小学3年ならば、そのくらいが普通だと思つるのは作者だけだらうか?

「私、特技も取り柄も特にないし・・・」

「バカちん!~!」

アリサは突然なのは向けてレモンを投げ、なのはの頬に命中した

食べ物を人に向けて投げていけません。食べ物を人に向けて投げてはいけません。大切なことなので2回言いました

「自分からそう言つ」と言つんじゃないの？！」

「やうだよ。なのはちゃんとしか出来ない」と、やうとあるよ

「大体あんた理数の成績はこのあたしよりいいじゃないの？！それで取り柄がないとか……どの口が言つわけ？」

「あつ・・・・・・」

アリサはなのはに飛びかかり後ろからなのはの口の端を引っ張った
「にやめて～らつて・・・なのは文系苦手だし・・・体育も苦手ら
し～」

引っ張られながら話すアリサとなのは。なんとも器用である

「2人ともダメだよ！…ダメつたら～」

すずかは一人を制止しようとする。が、この場合、アリサを止める
のが手つ取り早いのではないだろうか？

「ねえ、ねえってば！」

いつの間にか、3人の周囲には人が集まつてきており、そのことに
気がついた3人は顔を赤くした

その頃、ワイズはとゆうと・・・・・・

「お待たせしました。オリジナルブレンドコーヒーです」

「ワイスさん。注文お願いしまーす」

「はーい。少々お待ちください。すぐ参りまーす」

喫茶翠屋でウェイターをしていた

仕事終わったらケーキ貰えるし、張り切らないとなー!あいつらの
土産を金かけずにゲットできるのはありがてえ

働く理由としては、讃められるものではないよつだ・・・・・

無印編第一話（後書き）

死食經典義「今日はこんな感じです」

ワイズ「こんな感じも何も、本編の1話の半分くらいじゃねえかよ。ここのか？ こんなんじや読者なくなるぜ？」

死「しゃーないやん。本編の内容つい覚えになりかけて、見直そうとDVD探しでもなかなか見つからなかわ、レンタルしてるとこ見つけてもレンタル中だわで、見直すのに時間がかったんだもん」

ワイズ「だもんゆーな、さもい。怖氣が走る」

死「うわあーい。自分のキャラクボコボコに晒されているよ、俺」

ワイズ「こんな作者だけじょ、見放さなこでやつてくれや。感想とか待ってるぜ」

死「そこのヒーロー物語で書くつむー。」

無印編第2話（前書き）

死食經典義「予定より一回遅れちゃったけど、無事更新！！」

ワイヤーズ「モーモー。モーやつてちやといつもやればいいんだよ。
アホ」

死「」の調子で…とはいかないけど、一週間に一回は更新したいね
え」「

「ほら、 じつにちじか・・・・・・・・・」を通ると塾に行くのに近道なんだ」

学校の帰り道、アリサがそんなことを言つて、突然走り出した

無論、なのはとすずかはアリサを追いかけた

アリサは公園に入り、そこの横道を指差した

「こりよ、 こい」

「そうなの？」

「うん、ちょっと道悪いけどね」

その道をアリサを先頭にして進んでいく3人

この3人の中で先陣を切るのは殆どの場合でアリサだ

それにはとすずかがついて行くのが恒例となつており、今回もその形になつたようだ

その道を歩いている途中、なのははあることに気がつき、足を止めた

「あつ！・・・・・」

「こり、 タベ夢で見た場所・・・・・・・・？」

「どうしたの？」

「なのは？」

急に足を止めたなのはを不思議に感じたのか、アリサとすずかが声をかけた

「あ・・・・ううん。なんでもない……」めんじめん

まさかね・・・

先ほど感じたことを氣のせいだとしたなのはは、先に歩いていたアリサとすずかを走つて追いかけた

そしてその道をさらりに進んでいると・・・

(たすけて・・・・・)

突然聞こえた声になのはは足を止め、それに氣がついたアリサとすずかも足を止めた

「なのは？」

「・・・・・今、何か・・・声みたいなのが聞こえなかつた？」

「声?別に・・・

「聞こえなかつた・・・かな?」

3人は辺りを見渡し、なのはが聞こえた声のよつなものを探した

その時、再度その声がなのはに届いた

(助けて! !)

今度ははつきりと聞こえた声。なのははその声が聞こえた方向に走り出した

「なのは! !」

「なのははちやん?」

2人を後ろに置き去りにし、なのはは声の元に急いだ

「たぶん、こっちの方から・・・・・あつ!」

そして、なのはは少し走った先の道の真ん中に、1匹の動物が蹲つているのを見つけた

なのはは急いで駆け寄りフェレットの近くにしゃがみ込んだ。それに気がついた動物は傷付いていたが顔を少し上げなのはを見上げた

同時刻

「確か・・・この辺りだった気がすんだけど・・・・・?」

なのは達が歩いているのと同じ道を反対側から歩いているワイズがいた

彼がここにいる理由。それは昨夜はゲームに熱中していた為、思いつきり無視していた声のことを翠屋の手伝いの後に思い出した為だ

次元犯罪者を追つてきて返り討ちにあつた管理局員とか、次元漂流者とかの可能性もあるしなあ・・・

「声の質からして、坊主ぽかつたな。見つけたら管理局員がいるどつかの星に強制転送だな」

(ワイスー、ちょっとくらいには傷の手当でくらいしたらい?)

「却下、否決、不採用。理由はめんどー、以上」

「一体誰と話してこのだらうか?」

ワイスは道の左右を見ながら、ゆっくりと歩いていた

さつさ、微かに『助けて』つーのが聞こえたんだよなあ・・・へたしたら聞こえてた地元住人が、念話を飛ばした馬鹿を見つける可能性もあるつてことに気がつかんのか?

かくいうワイスはなのはと土郎に魔法の存在をばらしている。口止めしているから問題ないとは本人の談

(助けて!—)

ワイスの耳に今までよりも強く助けを求める声が聞こえた

「あつ!…ホントにバカか!?.コレだけ強く念話を飛ばすなんてよお!—」

(ほんと、バカだね。もし敵がいたら見つけてくださいっていつて
るようなものだよ?)

「それで、念話の出場所は判つたか?」

(「この道を真っ直ぐ。でも、同じ場所に3人ほど人が向かってるよ

」「つー?急げぞ!—!

見つけたら即座に回収して、「魔法文化が無い場所で不特定多数
に向けて念話を飛ばしました」って紙を貼つ付けて、管理局本局に
転送ばしてやる!! 鉢合わせするのが次元犯罪者ならそいつらもま
とめて送つてやる!!

・・・・・鬼か、「こつは?

ワイスは道の悪さを感じさせない速度で、念話の発信位置へと疾走
した

「そろそろ着く・・・・・つー

ワイスは念話の発信位置に人影があるのを確認すると、即座に茂み
に身を隠し、様子を窺い始めた

・・・・・ちょっと待て?あれって、聖祥付属小の制服じゃね?

「と、とりあえず病院!—

「獣医さんだよ!—

「えっと・・・」の近くに獣医さんつてあつたつけ

よりにもよつてなのはちゃん達3人組かよ・・・・（周囲に魔力反応はあるか？）

（ん～ちょっと待つて・・・・今のところは反応なし。それと、なのはちゃんが抱いてる動物が念話を出してたみたいだよ）

（ん、わかった）早いとこ、こいつから移動させるか

ワイスは茂みから音も無く出ると、何事も無かつたかのようになのは達のそばまで行つた

「おーい、なのはちゃん達。こんなところでビーチーした?」

「あ、ワイスさん!」

なのは達はワイスが先ほどまで茂みにいたことを知る由も無く、怪我をしてこる動物を見つけた経緯をワイスに説明してこる

ワイスは話を聞きながら、なのはの腕にいる動物を、正確にはその動物がつけている赤い珠を見ていた

「こいつはデバイスか？それに・・・管理局にこんな小動物の魔導師なんていたか？」

「せうだーこの近くの獣医さん知つてる！？」

「ああ、知つてゐゼ。そいつを連れてくんどう？付いてきな

ワイズはそういうと、なのは達を連れてその道を戻っていく

なのはは腕に抱いている動物を心配そうに見つめ、すずかも同じ視線を動物に向いている

アリサも動物が心配で、2人と同じように視線を向けていたが、不意にワイズに視線を向けた

「そーいえば、なんであんたがここにいるのよ」

「あ？ 翠屋の手伝い終わつたんで、珍しく散歩しようかと思つてな。なんとなく公園に向かつていたら、お前たちがいたって訳」

ホントは念話を聞いたからだ・・・・・・・なんていえる訳ねーしぬつせに出た言い訳だが、アリサは信じたようだ

「ほんと、珍しいわね。普段のあんたら直でゲームセンターなのに。でも、助かつたわ。おかげでこの子を獣医さんに見せれるもの」

「ふつ。俺の気まぐれに感謝しどけ」

「はいはい」

ワイズとアリサは軽口を叩きあいながら、はのはとすずかは怪我をしている動物の様子を看ながら動物病院へ歩いていった

その夜、高町家の夕食前、なのはは怪我した動物・フェレットの話を家族についていた

「でね、そのフュレットさんをしばらくウチで預かる訳にはいかないかなあ～って」

「ん～・・・フュレットか・・・」

士郎は腕を組み考え出した

そんな士郎をなのはは期待と不安が混じった目で見つめた

「どういで何だ? フュレットって?」

そんな言葉が出てきて、それを聞いた高町家の3兄妹はガクツと姿勢を崩した

「イタチの仲間だよ、父さん」

「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ」

フュレットがなんのか知らない士郎に恭也と美由希がどんなモノなのか簡単な説明をした

そこに料理を持ってきた桃子がやってきて、その会話に加わった

「フュレットってちひらやいわよね?」

「知ってるのか?」

無論、知っているからこそ先ほどの台詞だ。よって、フュレットのことを知らなかつたのは士郎だけだったといふ事である

「ん～と・・・これくらい」

なのはは自分の肩幅くらいまで手を広げた

「しばらく預かるだけなら・・・籠に入れておけて、なのはがちやんとお世話を出来るなりいこかも。恭也、美由希びつ~」

なのはが示した大きさを見た桃子はそう言って、恭也と美由希に贅否を尋ねた。士郎には聞いていなかつたりする

2人は反対はないと言い、それを聞いた士郎は頷いてなのはに許可を出した

「うん！ ありがとう！！」

なのはは許可が出たことにとても喜び、満面の笑みを浮かべた

食事が終わると、なのはは自分の部屋に戻り、アリサとすずかにメールを打っていた

「送信つと」

送信を終えたなのはは、携帯を閉じて充電器へと差し込んだ

その後、周囲から変な音が聞こえ出した

不思議に思ったなのははその音をよく聞いて田を開じた。すると・

(聞こえますか？僕の声が？聞こえますか？)

声が聞こえ、なのはの脳裏に赤い宝石が浮かんだ

「これってタベの夢と毎晩の声と同じ声・・・」

聞いたことのある声。なのはは田中に助けたフーレットのことを思い出した

(聞いてください！！僕の声が聞こえるあなた！！お願いです！！！
僕に少しだけ力を貸してください！)

(あの子がしゃべってるの・・・・・・?)

(お願い！！僕の所へ！！！！時間が・・・・危険な・・・・
・・もう・・・・・・・・・・・・)

もづ・・・なんだろうか？最後の部分がかなり聞き取りにくかった。
そしてその声は聞こえなくなつた

声が聞こえなくなると、なのははふらふらとベッドに倒れこんだ

同時刻、自宅であるライトイノベルを呼んでいたワイヤーズにもなのはが
聞いた声が届いていた

「・・・・・・しまった・・・あの小動物のことすっかり忘れてた・・・」

動物病院へと動物を連れて行つたはいいが、魔法を知らないアリサ

達がいたため強制転送が出来なかつたのだ

しかも、明日様子を見に行くことになつてしまつた為、ワイスは様子を見ることにしたのだが・・・その帰りに買ったライトノベルに集中してしまい、動物のことを完全に失念していたのである

「これだけはつきりと聞こえる念話を不特定多数に飛ばす・・・。なのはちゃん達の誰が念話に反応したのか知んねえけど、絶対に誰か向かうだろーな・・・・」

（あの3人の中だと、なのはちゃんが一番資質あつたから、多分なのはちゃんじゃないかな？それにもしかしたら、他にも声に反応した人がいるかも）

「ちつ！魔法文化の無いところで不特定多数に念話を飛ばすバカは駄けが必要だなあ！！」

その額には見事に#マークが浮かんでいた

ワイスは本を閉じて立ち上がり窓を開けた。そして、窓のふちに足を乗せた

外からひんやりとした風が吹き込み、バタバタとカーテンをなびかせた

ワイスは徐に外を見渡した。近くには誰もおらず静まりかえつていで、空には星が美しく輝いていた

「さて・・・運のいいことに誰もいない。絶好の出撃状況つてやつだな」

(だね 進路オールグリーン、発進ぞー！)

「ワイズ・カオストーン、バカを撲滅する……」

ワイズは窓のふちを踏み台にして、外へ飛び出した

……が、ここで一つ問題がある。ワイズの血脉はマンションの10階にある。そこから飛び出したらどうなるか。答えは『落下』

だが、ワイズは飛び出すと同時に飛行魔法を展開。少しも落ちることなく夜空へと飛び立った

夜空高く飛ぶワイズは一筋の流れ星のよう、星々の間を抜けて行つた

その夜、海鳴市内では多数の人が流れ星を見たと翌朝の話題になることはワイズの知るところではない

「あ、流れ星や。体がよくなりますよ！」

ある少女がそんな願いをしていたことも、今は語ることはないだろう

(お願い……届いて……)

動物病院の籠の中から念話を飛ばしていたフェレットは、自分がいる籠を影が覆つたことに気がついた

その影の方を見ると、以前逃がしてしまった黒い生物がいた

「グオオオオオオ・・・」

フェレットはすぐに行動できるように身構えた

その頃、なのははフェレットを預けた動物病院へ向かつた走っていた
そして動物病院の入り口に到着したとき、再びなのはを耳鳴りが襲つた

ハウリング音のような音。その音になのはは思わず耳を塞いでしまつた

「また、！」の音・・・・・・

その眩きに反応したかのよう、「突然音がやんだ。そしてその代わりに周囲の風景の色が灰色のような色になつていた

その周囲の様子になのはは一瞬戸惑つたが、すぐに病院内に向かおうとした

その時、病院の窓からフェレットが飛び出してきた

「あーあれはっ！！」

なのははすぐにそちらに視線を向ける。そこには逃げるフェレットとそれを追う黒い生物がいた

フェレットは近くにあった木の根元へ逃げるが、黒い生物は木のことなどまるで介せずに入っ込んだ

その衝撃で木は倒れ、フュレットは宙へと舞い、なのはのいる方へ吹き飛ばされた

それを見ていたなのはは、思わず両手を伸ばした

フュレットは宙で体勢を直し、広げられた腕の中へ飛び込んだキヤツチした際、衝撃が大きかつたためか、なのははしづらさをついてしまった

「なつ・・・なになに！？一体なに！？！」

田の前で起つていいる光景に、なのは思わず叫んでしまった

そこに追い討ちをかけるかのように、フュレットが喋りだした

「来て・・・・・くれたの？」

「しゃべつたつ…？？」

フュレットが喋つたことに驚いたなのははフュレットを膝の上に落としてしまった

まあ、当然だらつ。普通、動物は喋らないのだから

「グオオオオオオオオオ・・・・・・」

そんなんのはの前で黒い生物がまた動き始め、なのはに向かつて突っ込んできた

「あやあああああーー！」

なのはは田を強く閉じ、すぐに来るであらう衝撃に身を硬くした
だが、いくら待っても衝撃は」なかつた

恐る恐る田を開けると、そこには黒い生物を片手で受け止めている
ワイスがいた

「大丈夫か、なのはちゃん？」

「ワイスさんーー！」

ワイスはなのはの様子を見て、大丈夫そうだと安心した

「グオオオオオ・・・・・・！」

黒い生物はワイス」となのはを吹き飛ばそうとしているようだが、
ワイスはピクリとも動かない。それでも黒い生物は前に進もうとしている

「てめーはちょっと離れてるやーー！」

ワイスは黒い生物を押さえたまま体を捻つて回し蹴りを喰らわせる

その威力に黒い生物は吹き飛んで、塀に叩きつけられた

さらにワイスは黒い生物に人差し指を向ける

ワイズの指先が光り、宙に円を描き始める。すると、他の場所からも光が現れ、一瞬のうちに魔方陣が作り出された

「んで……」こつはついでだ！求めるは雷鳴くくく稻光！…

ワイズが叫ぶと、魔方陣から一筋の稻妻が放たれた

稻妻は一直線に黒い生物まで飛んでいき、命中した

「ぐおおおおおおおおおおおおおお…！」

黒い生物は大きく吼え、その場につづくまつた

な・・・なんなんだ、今の魔法は！見たことの無い魔法陣だ！それには、この人は一体・・・・・

ワイズの放った魔法を見たフェレットは、未知の魔法を使うワイズに体を強張らせた

ワイズはそれを見ていたが無視してなのはに話しかけた

「なのはちゃん、走れつか？」

「あ、はい！」

「取り合えずこつから移動するぞ。あと小動物。きつちりしつかり説明をして貰うからな！それが終わったら厳しく凶育してやるから覚悟しとけ！…」

「うえつ！？小動物つてぼく！？それに教育の文字がなんか違う！

このフレットとの出会いが、高町なのはの「これから」の運命を大きく
変えることになる」と、今この場にいる3人は思いもしていなか
つた

？」

無印編第2話（後書き）

死食經典義「まずは感想のお礼から! UNCLE SAMurai MASTER様、天意無法の歌武鬼者 鬼龍院獸侍郎様、感想有難う御座います!」

ワイズ「ん、名前がなげえ……縮めていいか?」

死「こらー!失礼なこと言わないの!…」

ワイズ「ちつ・・・」

死「と、ここで今回ワイズが使った魔法について触れてときましょう」

求めるは雷鳴くくく稻光

富士見ファンタジア文庫出版のライトノベルで、鏡貴也先生の作品の伝説の勇者の伝説シリーズに出てくる魔法の一つ。魔方陣から雷撃を放つ。ワイズが使ったのはその再現。ワイズが持つ強大な魔力をつぎ込めば、本物の雷を凌駕する威力にすることも可能

死「こんなとこかな」

ワイズ「あれは使いやすいぜ。ネギまの奴だと威力ありすぎてよ。読んでもすぐにプ「ストップ!…」・・・んだよ」

死「それはまだ秘密のアツ「ちゃん!」

ワイズ「とりあえず、ぐだらねえギャグを言ったてめーには凶育だ

な

死「うえつ！？」

ワイズ「黄昏よりも暗き存在、血の流れより紅き存在、時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我今ここに闇に誓わん、我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに我と汝の力もて、等しく滅びを与えんことを！竜破斬！！！」

ワイズ「んじゃ、そーゆー」とで、またなー」

無印編第3話（前書き）

ワイズ「前回の更新から大体1ヶ月つてーと」か。遺言はあるか

死食経典義「遺言はないけど、いい訳ならある！」

ワイズ「え、ばんじやねーよ！」

死「詳しくは後書きで」

動物病院にいた黒い生物から距離をとるために走っていたワイス達
2人と1匹

ワイスはなのはのペースに合わせている為、なのはは息切れをする
こともなく走つていられた

「えつとその・・・なにがなんだか良く分からぬけど・・・一体
なんなの？何が起きてるの？」

なのはが腕に抱えているフェレットに問いかけた

それはそうだらう。いきなり頭に声が聞こえ、その声の下に行つて
みると見たことも無い生き物がいて、周囲を破壊していたのだから

「君には・・・資質がある。お願い、僕に少しだけ力を貸して」

「資質？」

フェレットはなのはの疑問に対し、まともな回答をしないで、訳の
分からぬことを言い出した

ワイスは何も言わずに黙つてその話を聞いている。普段のワイスな
ら即座に突つ込み、言葉で捻じ伏せているのだから、ちょっと不気
味だ

「僕はある探し物の為にここではない世界から来ました。でも・・・
僕一人の力では想い遂げられないかもしない！！だから・・・

・迷惑だと分かってはいるんですが・・・資質を持った人に協力してほしくて・・・・

フュレットはなのはの腕から飛び出し、地面に降りてからと続けた

「お願いします！お礼は必ずします！僕の持っている力を、あなたに使ってほしいんです。僕の力を・・・魔法の力を！..」

「魔法・・・？ワイスさんみたいな？」

なのはは思わずワイスを見上げた。なのははワイスが魔法使いだと言っていたことと田の前で魔法を使つたのをしっかりと覚えていたワイスはなのはの頭を撫でた。撫でられているなのははとても気持ちよさそうに目を細めている

「ま、この小動物が言つてる魔法と、俺の魔法は別物だな。まずそれが一つ」

「別物なの？それに一つって？」

「聞いてりやわかるよ。んで、二つ目。小動物、なのはちゃんの疑問に何故ちゃんとした回答をしない。相手の疑問を無視して話を進めるのが礼儀か？あ、？」

「す、すみません・・・」

ワイスはフュレットに思いつきり顔を近づけて話している。笑顔だが、その後ろには般若や夜叉の面が見えている

「最後に3つ目。一人だと無理臭いから迷惑なのはわかってるけど資質を持つた人に手伝って欲しい？御礼は必ずする？はつ！馬鹿言つてんじゃねえーよ。一人で難しいなら、増援を頼むなり、始めから複数で来てれば良かつたんだよ。それに迷惑をわかつてゐたら、始めから無茶苦茶に念話なんぞ飛ばすな。それに反応してアレがきたんだろーが。なのはちゃんよりも小さい子供だったらどーすんだコラ。しかもお礼は必ずするだあー？金くれならまだしも、仮に誰かを殺してとか言われたらどーすんだよ、てめーは？ああ、？」

一息にワイスは喋りきった。そして、自分のとつた行動の迂闊さに気がついたフェレットは頭を下げる

「・・・じめんなさい」

「じめんですんだら、管理局はいらぬーよ、阿呆」

そのとき「グオオオオオ」と、先ほどの黒い生物の声が2人と1匹の耳に聞こえた

声のした方向、上空を見上げるとその生物が口を大きく開けて落下してきていた

しかもその生物は先ほどのものとは違い、頭が2つ増えて3つ首になっていた

なのはは田を見開き固まってしまった

「ひー？！？」

「ほやつとすんな！」

ワイスはなのはを突き飛ばしてその射線上から避けさせ、自身もなのはの反対側に回避した

「そんな・・・僕が見つけたときは一つだったのに・・・いつの間に二つ取り込んだんだんだけ!?」

「んなこたービーでもいい。お小動物!アレ、消してもいいのか?一瞬で抹消できるんだが?」

地面に激突し、もがいている生物を見ながらワイスはフュレットに聞いた。どうやら黒い生物を消し去るつもりのようだ

そんなワイスの問いにフュレットは焦ったように言った

「だ、駄目です!アレは膨大な魔力の塊の思念体なんです!下手すると、周囲一体を巻き込んで爆発の可能性もあるんです!...」

「・・・じゃー封印か?でも俺封印苦手なんだよなー。下手したら一回辺全体更地になるかも」

「・・・僕に考えがあるので、それの足止めをお願いします・・・」

「はいよ」

ワイスは今だもがいている生物に近寄り、その体に腕を回した

「せーーーのひーーー」

「グオオ！？」

ワイスは生物を持ち上げ、更に天に向かつて放り投げた

「…………」

その光景になのはとフレットは口大きく開けてしまった

ワイスはそんな2人に言った

「んじゃ、ちょっと空うえで遊んでるから。小動物、その間にてめーの
考え方実行しどけ。ろくでもねー考えだつたら、後で折檻だ」

「上？」

「うえっ！？」

ワイスは上空に投げた生物に向かつて跳躍。その勢いのまま蹴りを
放つた

「グオオ！！」

その衝撃で生物は更に上空に上がり、ワイスは足場もあるかのよ
うに宙を蹴つて追撃。それを繰り返し、かなり上空まで行つてしま
つた

「…………はっ！？」、これを！――

フレットは首下に下がつて赤い宝石を取り、なのはに渡
した

「暖かい・・・」

その宝石を手にしたのはは、それから伝わる暖かさを感じた

「それを手に口を開じて心を澄まして・・・そして僕の言ひ通りに言ってー！」

なのはは手口を握り締め、フュレットを見つめた

「いい? こぐよー。」

「うんー。」

宝石が鼓動し、周囲が静まり返った

「管理権限、新規使用者設定機能・・・フルオープン」

フュレットの言靈に宝石が答え、地面上に魔方陣が浮かび上がった

「繰り返して・・・・風は空に、星は天に」

「風は空に・・・星は天に・・・」

「不屈の心はこの胸に」

「不屈の心はこの胸に」

宝石の鼓動が早くなり、それを握り締めているのはの手の中で輝きだした。その光は鼓動と共に宙へと広がっていく

「LJの手に魔法を」

「LJの手に魔法を！」

なのはは宝石を掲げる

「「レイジング・ハート・セーットアップ！！」」

「Stand by Ready .Set up】

宝石、レイジングハートがさらに光り輝き、天に向かってピンク色の光が雲を消し飛ばして天へと伸び上がった

「なんて、魔力だ・・・」

天に伸びたのはなのはが持つ魔力。その魔力の柱を見たフェレットは思わずそう呟いてしまった

だが、当の本人はそんなことなど知るはずもなく、ただあたふたとしていた

「え？ええ！？」

「落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する魔法の杖の姿を！
！そして君の身を護る強い衣服の姿を！！！」

「そんな！？急に言われても・・・えっと・・・・・・え～っと」

LJのフェレットは本当に何を考えているのだろうか？訳の分からな

い状況でその様なことを語りて、余計に混乱させたいのだろうか？

「Please settle down. — May I select shape and decoration the Barrier Jacket and Device based on your image」（バリアジャケットとデバイスはあなたのイメージに基づいて、こちらで最適化します）

「わたしのイメージ・・・・・・・とりあえず、これで！」

ビューアのイメージは固まったようだ

「All right. Stand by Ready」

レイジングハートの声で、なのはの姿が光の中に消える

宝石は巨大化し、何処からともなく現れた金属製のパーツが次々と接続されていく

そしてなのはの衣服が消え、代わりに光がなのはの体を包んでいく一瞬の時間でそれらのことが行われ、光が弾けると姿を変えたなのはがいた。弾けた光りは鳥の羽の形となつて辺りに飛び散った

「成功だ！」

「いいで、なのはがどのようなイメージをしたのか説明しておいつ

なのはの脳裏に浮かんだイメージ。魔法の杖はワイヤーと一緒にやつたゲームに出てくる魔法使いが持っていた杖を思い浮かべ、衣服は

聖祥大付属小の制服を思い浮かべた。ただ、その時なのははもう一
つワイヤーと一緒に見たアニメ、機動戦士ガンダムW — End 1e
ドレスワルツ
SS Wallz の主人公機、ウイングガンダムゼロカスタムも何故
か思い浮かべていた

そして今のはの姿はというと・・・杖はなのはがイメージした
魔法使いの杖の素材を金属にした形になつていて、バリアジャケット
トは聖祥大付属小の制服の細部をいじつたモノになつていて、腕には
ウイングゼロカスタムのアームカバーを簡略化したものが付き、
背中には同じくウイングゼロカスタムの羽を小さくしたアクセサリ
ーが付いている

「ふえ？ええええっ！？」

なのはは自分の姿が変わつてることにかなり驚いている

成功したことに喜んでいるフュレットと何がどうなつてているのか分
かっていないなのはの間に、何かが落ちてきた

「これって・・・やつきの黒いののかな？」

その何かは、黒い生物の体の一部だった

その生物の一部を見ていたなのは達に上空から声が届いた

「そこじけえーー離れろおーーー！」

上空から聞こえたワイヤーの声になのはは上を見上げた

そこには黒い生物がなのは達目掛けて落ちてきていた

「わわ・・・わわわつ！？」

なのはは急いで落ちてくると思わしき場所から移動した

その数瞬後、なのが先ほどまで立っていた場所に黒い生物が落下。その上にワイスが思いつきり踏みつけるよつて落下してきた

「さて、小動物。準備は出来てつか？」

「・・・・・・は、はい」

思いもよらぬ再登場の仕方に固まっていたフェレットだったが、ワイスの問いかには反応できた

「んで？ ビーやって封印すんだ？ てめーは今魔力空に近い状態なんだろう？」

「え、ええ。なので、現地協力者の力を借りて、ひい！？！？」

フェレットが現地協力者と言った瞬間、ワイスは再度般若の笑顔になつた

「あんなー、小動物。俺は言つたよな。ろくでもない方法だつたら、折檻だつてよ～」

「ひい！？で、でも、今はコレしか方法が！」

「後で折檻な。答えは聞いてない」

「そんな理不尽なー?」

ワイスは有限実行をする、間違いなく、絶対に

フュレットはワイスを見て反論をしようとしたが、笑っていない笑顔を見てガタガタと震えだしてしまった

そんな様子のフュレットを見たワイスは、溜息を吐きながらなのはに聞いた

「おっヒ?」

そんなコント紛いの事をしていたせいだらうか。黒い生物はワイスを振り落として上空へ飛び逃げた。そして、ワイス達の様子を窺つている

ワイスはそれを横目になのはに問いかけた

「んで、なのはちゃん。封印、出来そつか?」

「えっと・・・わからんない?」

「H o w m u c h d o y o u k n o w a b o u t m a
g a g ? 」(魔法についての知識は?)

「ワイスさんが使っているの以外見たことありませんー!」

魔法文化がない世界の住人に、魔法についての知識を求めるのは、おかしなことではないだろうか?なのははワイスという存在がいたら魔法を見る機会は多々あつたが、ワイスは魔法については何も

教えていない

ワイズは後に教えたかった理由について、「俺教えるの下手、つかめんどーだつた」と語っている

「Than, I teach you everything. Please do as I say」（では、全て教えます。私の指示通りに）

「は、はい！」

「デバイス！なのはちやんは任せたぞ！もし何かあつたら、無茶苦茶に弄繰り回してやるからな…！」

「Yes sir」

黒い生物はワイズ達に田掛けて急降下してきた

ワイズはその場に飛び上がり回避。なのはは後ろへ飛んで、そのまま空へと飛び上がってしまった

「ええええっ…？」

飛べるようになつていていなかつたなのはは、何度も田にかかるかわからぬ驚きの声を上げた

そんなのはに狙いを定めたのか、生物は体のあちこちを槍のよつに伸ばし、攻撃を仕掛けた

「Flyer fin」（飛びます）

「あわ！あわわわわー！？」

なのはは自分に向かってくる攻撃を、なれない飛行で不恰好になりながらも避け、避けきれないものはレイジングハートがプロテクションを張つて防御した

生物はなのはに対する攻撃の手を休めず、宙に浮かび上がり連續でその身を伸ばした

だが、なのはは民家の屋根を跳ねるように飛びながら攻撃をかわした

「いじつこもじるつてこと、忘れてるんじゃねーよー。」

なのはに対しても攻撃をしていなかつた生物にワイスは接近し、拳を振り上げた。その振り上げた拳、いや腕全体が黄色い装甲に覆われていた

「衝撃のお・・・ファーストブリットオオオオツ！…」

「グオオオオオオ！？」

ワイスの放つた一撃は黒い生物の体へ深々とめり込んだ

その衝撃は凄まじく、地面にいたフェレットのところにも届いたほどだ

そんな一撃を喰らった生物は勢いよく吹き飛んだ

さうして強すぎる衝撃で生物の体は3つにわかれた

3つにわかった生物は空中で姿勢を直し、家屋の屋根に着地。そしてそのまま逃走を始めた

「あー逃げた！」

『グオオオオオ』

生物は家屋の屋根を飛び跳ねるようにして逃げる

なのはは飛び上がつて追いかけるが、生物の移動速度の方がわずかに速く、追いつくことが出来そうもなかつた

「追いつけない！あんなのが人のいるところに出ていったら・・・！？」

人のいる場所にこの生物が出た場合の被害は計り知れないだろう

だが、これらの生物は人前に出ることは出来ない

「自壊せよ、ロンダーニーの黒犬。一読し、焼き払い、自ら喉を搔き切るがいい。縛道の九、崩輪」

いつの間にか生物の正面に移動していたワイスが言靈を唱えると、指先から黄色い繩状の魔力が放たれて生物の体に巻きついた

「グオオオ！？」

「そつちから喧嘩吹つかけてきたつーんだから、逃げんなよ。なあ？」

「ワイズさん！」

「お、来たかなのはちやん。早速だけど、ここからの封印頼むわ。
俺封印苦手だからよ」

「よくわからないけど、どうしたら・・・？」

封印といつものどのように行えばいいのかわからないのはの真
下にフュレットが来て、封印の方法を教えた

攻撃や防御は願うだけで発動するが、より大きな力を必要とする魔
法には呪文が必要になること。心を澄まして、そうすれば心の中に
自分の呪文が浮かぶということを

なのはは言われた通り、目を瞑り心を澄ました。そして自分の呪文
が見つかったのか、目を開いた

「リリカル！マジカル！」

その呪文に呴わせ、フュレットが封印対象の指定の言葉を呴ついた

「封印すべきは呪まわしき器、ジュエルシードー！」

「ジュエルシードー封印ー！」

なのはが高々を宣言すると、レイジングハートからピンク色の光の
帯が伸び、3体に分かれていた生物に巻きついていく

「リリカル、マジカル！ジュエルシード、シリアル18！20！2

「――封印――」

封印するシリアルナンバーを言つと、さらに光の帯が生物達に伸び、その体へと刺さっていく

そして、生物達は「グオオオオオ・・・」といつ断末魔を残し、消滅した

「やつた！」

フュレットは封印が成功したことに喜びの声を上げた

ワイスは、そんなフュレットを無言で持ち上げた

「さつを言つたよな？ らくでもねー方法だつたら折檻だつて・・・
よおーー！」

「え？ なにー？」

「魔法文化のない世界の住人に魔法を使わせせんなつーのーーなあ
ー！」

「いだいだだだだだだだだだだだつーーーー！」

ワイスは雑巾を絞るように、フュレットを捻っていた

「しかも、貴様はのほほんと見てるだけだーーー？ デバイスを渡して、
はい、お仕舞いつてか？ あ、ーーー！」

「ま、魔力が枯渇してて・・・」

「答えは聞いてない……」

「そんな理不尽な、いだだだだだだ……やめ、ほんと……痛
～い！？！？」

動物虐待にも等しい」としてこのワーズをなのは黙つて見ていた

ワーズさん、楽しそうなの

黙つて見て、頭ではそんなことを考えていたようだ。しかも、フレットを助ける気配もないのは如何なものだろうか？

そんなんのはにフレットは視線を向けて助けを求めた

「た、たたた、助けてえ～～！！」

「それは無理なの。ワーズさんは言つたことば絶対するから……
諦めて？」

「そんなん～～いた、いたただだだだ……！」

フレットの体が捺じ切れないことを祈りつつ……

死食經典義「まぢは言い訳から」

ワイズ「遺言だな。言ってみる」

死「web恋姫無双のプレオープン テストをやつてた！」

ワイズ「…………ほう？勿論、孫吳所属だらーな？それ以外だったら……死ぬぞ？」

死「勿論孫吳に決まってるでしょうがー雪蓮と祭は俺の嫁！」

ワイズ「俺の嫁だ！抜けたこと」と抜かすついなら、ツブスぞ」

死「…………まあ、そんなこんなで、こいつが出来なかつたのよ。ある程度放置できる状況になつてきたので、こいつに戻つてきた」

ワイズ「ま、チマチマ更新してけよ？じゃないと、そのうち読者に殺されるんじやね？」

死「ガクブルガクブル……」

ワイズ「つと、次回は俺のステータス紹介の予定だ。その後に本編に戻るんでよる」

死「しかし、3話かけて1話と2話途中つてのは遅いかな？」

ワイズ「知らん。劇場版のDVDレンタル出来たから修正するつーたのはお前だろーに。遅い遅くないは読者にでも聞け、阿呆」

ステータス情報（前書き）

死食經典義「今日はワイズのステータス情報を公開します」

ワイズ「公開早えーな」

死「元々ステータスとかは作ってあつたから、それを使つただけだ
しねー」

ステータス情報

死食經典義（以降「死」）「えー今日はタイトル通り、今現在のワ
イズのステータス情報の公開になります」

ワイズ（以降「ワ」）「プラバシーの侵害で訴える前に消すぞ？」

死「あと、今日は本編で自分が魔法を使えるようになつたばかりの
なのはちゃんにも」登場していただきます！」

ワ「無視か？」

なのは（以降「な」）「よろしくお願ひします

死「礼儀正しいなのはちゃんには、飴をあげよ」

な「ありがとうなの

ワ「んで？しょきこしゃさん極限馬鹿駄目作者YOO。俺の情報公開つて何処までや
んだ？本編未登場のもいろいろあんだけどよー」

死「無論、公開しても問題ないと」りまあではだす！」

ワ「あつぞ」

死「未登場は、出てきたときの後書きで公表の予定だし

な「でも、作者さん忘れっぽいから忘れちやうとしたじや？」

死「グhaarrrr!?

ワ「はつーなのはちゃんとまで言われるよーじや、ホント駄目だな
テメー」

死「・・・・・いい感じにダメージを受けたところで、基本ステ
ータスを開示に行きましょ・・・」

クラス：ワイズ・カオストーン

マスター：なし

真名：混沌の賢者の石

性別：男性

身長・体重：189cm 64kg

誕生日：不明

血液型：不明

イメージカラー：銀

CV：小山力也様

特技：観察、記録

好きなもの：可愛いもの、萌えるもの、成長するもの、自分の悪を
認識している者

苦手なもの・生意気な男、成長しないもの、絶対正義を掲げるもの

属性：混沌・善

筋力：C

魔力：EX

耐久：EX

幸運：B

敏捷：B

宝具：EX

クラス別能力

不老不死：EX 呪詛や吸血鬼が保有する不老不死よりもレベルの高い不老不死。どんなに傷を被つとも、元の状態に戻る世界の修正に近い。ほんの僅かでも欠片、1本の髪の毛や1滴の血でも残つていれば、蘇生可能。石に貯蓄されている魂のストックがなくなつた場合発動しなくなる

保有スキル

陣地作成：E 自分に有利な陣地を作り上げる。ワイズの場合は自分が住みやすい部屋を作る程度しか出来ない

黄金律：A 体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの運命

吸収同化 対象の魂と魔力を自らのうちに取り込み、自身の一部とするもの。相手の同意、もしくは相手が死ぬ直前でなければ使えない

宝具

混沌の賢者の石・ワイヤー自身がなっている『混沌の賢者の石』。無限の魔力と不老不死を与える古より伝わるロストロギア。管理局ではもっとも危険なロストロギアとして指定している

七大罪：嫉妬、色欲、暴食、強欲、怠惰、憤怒、傲慢の7つからなる人間がもつ大罪の名を冠する7つの能力。1つ1つの能力が強すぎる為、ワイヤー自身の手でランクダウンされているが、ワイヤー自身でこのランクダウンを解除出来る。完全開放時（解除状態）では能力名が変化する

嫉妬 通常使用時・エンヴィー、完全開放時・？・？・？・？・？・？自身の外見を変化させる能力^{スキル}。変化した人物や生物の能力を使うことが出来る。変身対象のDNA情報がなければその対象になることは出来ない。ワイヤーが変化対象者の魂を保持している場合、その魂を表に浮上させることで、その人物そのものになることが可能

色欲 通常使用時・ラスト、完全開放時・？・？・？・？・？

暴食 通常使用時・グラトニー、完全開放時・？・？・？・？・？

強欲 通常使用時・グリード、完全開放時・？・？・？・？・？

怠惰 通常使用時・スロウス、完全開放時・？・？・？・？・？

憤怒 通常使用時・ラース、完全開放時・？・？・？・？

傲慢 通常使用時・プライド、完全開放時・？・？・？・？

七美德：忍耐、純潔、節制、救恤、勤勉、慈悲、謙讓の7つからなる人間がもつ美德の名を冠する7つの能力。1つ1つの能力が強すぎる為、ワイル自身の手でランクダウンされているが、ワイル自身でこのランクダウンを解除出来る。完全開放時（解除状態）では能力名が変化する

忍耐 通常使用時・ペーシェンス、完全開放時・？？？？？

純潔 通常使用時・チエイスティティー、完全開放時・？？？？？

節制 通常使用時・テンペラランス、完全開放時・？？？？？

救恤きゅうじゆ 通常使用時・チャリティー、完全開放時・？？？？？

勤勉 通常使用時・デリジエンス、完全開放時・？？？？？

慈悲 通常使用時・カインドネス、完全開放時・？？？？？

謙讓 通常使用時・ヒューミリティー、完全開放時・？？？？？

ワ「…………いろいろ言ひてーことがあんただがよお」

な「なんでF a t e / s t a y n i g h t 風なの？」

死「なんとなく、その方が格好よさ氣だつたから」

ワ「なのはちやんが言つたのが1つ。次に、なんで俺の名前がクラス名なんだよ？」

死「ワイズ・カオストーンて言つのは、アルハザードに付けて貰つた呼び方でしょ？それに、混沌の賢者の石になつた時点でお前は『混沌の賢者の石』って言つものになつてゐる」

な「？？？」

死「わかりやすく言つと、ペットの犬に名前をつけるのと同じよ。秋田犬と言う犬種にハチつて名前をつける様なもんなの」

な「なるほど」

ワ「ほう。んじゃ、耐久、魔力、宝具のEXはビーしてだ？」

死「耐久は石による不老不死。魔力は同じく石による無限魔力。宝具も全部合わせたらランク外なので」

ワ「チートだな」

な「チートなの」

死「チートを作りたかつたからいいのー！」

ワ「あとよー。宝具の七大罪と七美德、殆ど『？？？』になつてんだが？」

死「それは、ほら。先に言つちやつたら面白くないでしょ？使つた回の後書きにステータス情報の更新つて形でアップするつもりだし

ワ「ほほう・・・」

な「きっと書かれてると思つたの」

死「忘れません！」

死「んじゃ、次行つてみよ」

な「ワイスさんのステータスはもう出したよ？」

ワ「なにすんだ、これ以上？」

死「ちょっとした裏話をね」

ワ「なに企んでんだか」

死「ワイスが生まれた経緯について、ちょっと触れておこうかと」

ワ「ほおー。それは初耳だ。どんなで俺の設定が出来たか話してみろや」

死「この始まりは『鋼の錬金術師』の賢者の石なのよ。アニメの最終回付近で、あれ？これ使えるんじやね？って思ったのが始まり

な「ハガレンは感動だつたの！」

ワ「確かに、賢者の石で繋がりはあるが・・・混沌とはなんの関係のねーだろ？」

死「まーね。俺もハガレンの賢者の石の設定でこいつと思つてたん

だけど、それだと上限付いかやつでしょ

ワ「そりやそーだわな。あつちは無限に使えるって訳じゃねーし」

死「そんな時に田に飛び込んできたのが、漫画の月姫とヘルシング！」

ワ「・・・おい、まさか・・・・・」

死「月姫のネロ・カオスとヘルシングのアーカード。この2人の不死不老の概念つーかそんなん取り込んだら手に負えなくなるんじやね。と思って設定を組んだのだ！…！」

ワ「うわあ、なにこいつ・・・・・

死「ネロ・カオスの不死不老の概念とアーカードの不死不老の概念を賢者の石に融合させたら、あら不思議。チートの完成でごじゅいます」

な「む、無茶苦茶なの・・・・・

死「不死の否定を喰らつても、世界の修正で元に戻る。直死の魔眼を使われて刺されても魂が1個消えるだけ！」

ワ「おい、直死でも無事なのはおかしいんじゃねーか？」

死「『混沌の賢者の石』は複数の魂の高密度集合体の総称であつて、概念じゃないのよ。魂の1つ1つが『混沌の賢者の石』なので、その全てを殺さないと死ない」

な「ビーグー」となの？」

死「例をあげるか。犬にも色んな種類がいるよね。チワワだったり、秋田犬だつたり、ドーベルマンだつたり、セントバーナードだつたり」

な「うん」

ワ「次元世界を含めたら数万種類以上になるんじゃないかな？」

死「その中の1匹を直死の魔眼で殺したとしよう。そしたら、犬といつ分類の動物が全部死ぬわけじゃないでしょ」

ワ「なるほどな。たしかに直死の魔眼でも殺せないわな」

死「それに、ワイズという1個人を殺すっていうのも無理。ワイズ『混沌の賢者の石』だから。それに直死で刺しても、世界の修正が入って元に戻っちゃう」

な「むずかしくてよくわからないの・・・」

ワ「ま、いざれわかる時が来るさね」

死「そんなこんなで『』までお送りしました。今回は『』で終わりとなります」

ワ「やつと終わつたか」

な「むずかしくてわからな」というもあつたの」

死「難しいのは俺自身よく理解してゐつもり。質問とかあつたら隨時受け付けてるので、いつでもどぞ~」

ワ「んじゃ、今日はなのはぢゃんに締めてもらつか

な「ふえ！？」

死「いいねそれ。お願ひするよ」

な「え、え~と・・・感想や応援をまつてるので」

ワ「叱咤激励や批評も待つてるぜ」

な「では、また次回なの！」

死・ワ・な「次回も全力全開！」

ステータス情報（後書き）

死食經典義「今日は後書きなし」

ワイズ「いや、コレ自体が後書きだ」

無印編第四話（前書き）

死食經典義「毎度お久しぶりです。死食經典義で御座います。前の更新から彼は1ヶ月近く、更新遅れて、本当に申し訳ない！！」

ワイズ「読者も減ってるんじゃねーの？」

死「うぐう・・・」

みなさん、高町なのはです！

わたしが助けたフェレットさんがピンチになっていたとき、ワイスさんが助けに来てくれました

そして、フェレットさんから魔法の力をくれました。

平凡な小学3年生だったわたし、高町なのはの運命が変わった瞬間でした

黒い生物を撃退し、ジュエルシードという小さな青い宝石を封印したワイス達は戦闘による破壊の跡が目立つ路地から一路公園に移動していた

夜の公園は人影もなく静寂に包まれていた

なのはとワイスは近くにあつたベンチに座った

「えっと・・・大丈夫？」

一息ついたなのはの口から出たのは、そんな言葉だった

その声を掛けられた対象はといつと・・・

「・・・きゅう〜〜〜〜〜」

ワイスの手の中でぐつたりとしていた

それもそつだらけ。公園に移動するまで、ずっとワイスに持たれていたのだ、尻尾の先で・・・・・。

ぐつたりしてもなんら不思議はない

「さて、ビーいつた経緯でアレがここにあるのか話してもうつか」

「それより自己紹介が先だと想つの」

「それもそーか。んで、小動物。てめーの名前はなんだ？偽名を使つてもわかつからな」

そんなワイスの迫力にビビりながらも、フュレットは自分の名前を言った

「ユ・・・・ユーノ・スクライアです」

「高町なのはです！」

「ワイス・カオストーンだ」

ワイスの名前を聞いたフュレット・・・もとい、ユーノは首を傾げながらワイスに訊ねた

「ワイス・カオストーンって、歴史書の中に出てくる過去の人物の名前じゃ・・・？」

「過去も何も、それが俺の名前だ」

「はあ・・・」

ユーノは納得の言つていらない返事をしてしまった

それもそうだらう。自分には偽名を言つたと、自分は過去に存在したと言われている人物の名前を言つたのだから

対するワイスはユーノの様子を気にした様子もなく、質問をぶつけた

「んで、なんで魔種青石まじゅせいけいせきがこんな場所あんだ? あれはきっと遺跡いせきだと地中に埋めたはずなんだが?」

「魔種青石? 隨分昔の呼び方ですね? 今はジュエルシードって言つ名前ですよ。それに遺跡いせきだと埋めたってビリーフのことですか?」

ユーノは思わず聞き返してしまった

ジュエルシードは古い文献には魔種青石の名前で載つていたが、その内容からジュエルシードと改名された過去があった

今現在では、考古学者の間でも魔種青石の名前で呼ぶものは殆どおらず、知っているものすら一握りの忘れられかけている名前だ

「質問に質問で返すな、阿呆。俺の質問にやがんと答えたたら、てめーの質問に答えることを考えてやつてもいいぜ」

「はあ・・・えつとですね、僕が発掘作業の指揮をとつて掘り出したんです。でも、発掘後の輸送中に原因不明の事故が起こってしまい、地球に落ちたんです。僕はジュエルシードを回収しようとしたんですが・・・・・」

「返り討ちにあつて、なのはぢやんを巻き込んだ……と」

「お礼は必ずしますーなので、どうか力を貸してくださいセーー。」

ユーノは小さな頭をワイズとなのはに向けて深く下げた

なのははどうしたものかと、ワイズに視線を向けた

そんななのはの頭に手を置き、撫でながらなのはを見て言つた

「俺はなのはぢやん次第だ。なのはぢやんが手伝ひつーなら、俺は喜んで手を貸してやる」

(ג' טבת)

なのはは暫く考えていたが、意を決したのかヨーノを田の高さまで持ち上げてこう伝えた

「ビ」まで力になれるかわからないけど・・・・・・

「うーーーおひがといわじゅーーー

なのははコーンの願いを受け、ジュエルシードの探索封印の手伝いをすることに決めたようだ

そんなのはを満足そうに見ながら、ワイスはユーノに話しかけた

「んで、魔種青石……じゃない、ジユエルシードはこくづばら撒かれたんだ? 21個全部とか言わねーよな?」

その質問にユーノは目を逸らした

「……おい」

「……21個全部です」

「…………めんでーなあ、おい…………」

まあ、なのはちゃんが今回3個封印したから、残りは18個か。
……魔種青石^{ジユエルシード}は発動しねーと場所の特定は難いしなあ……。
本来の目的の『アレ』はまだ目覚めてねーみてーだし、まあ、ぼちぼちやつてくか

ワイスは手を数度叩いて「さ、今日はもう遅い。送つてくぞ。詳しい話しさは明日でも大丈夫だろーしな」と提案した

反対意見はなく、その話し合いはここでお開きとなつた

余談だが、夜に無断で出かけたなのはのことを恭也達が待つていて、事情の説明を面倒そうにワイスがしてたのも、夜遅いからとなのが自分の部屋にワイスを泊めると言い出し、それに反対した恭也がなのはに「そんなお兄ちゃん嫌い!」と言われダメージを受けたのも、あくまでも余談である

翌日、なのはは元気に学校に登校し、ユーノは一人なのはの部屋で

あることを考えていた

あのワイズって人、なのはと比べ物にならない魔力を持っていた。
・・それにジュエルシードのことも何か知っていた感じだった

昨日のワイズとの短い会話の中に出てきて感じた、幾つかの疑問
自らの事をワイズ・カオストーンと名乗つたこと。ジュエルシード
を今は使われることのない古い呼び名の魔種青石と呼んだ事。そし
て見たことの無い魔法を使っていたこと

ワイズ・カオストーンは古い文献に何度も出てくる有名な名前だ。
新しいものだと時空管理局創設の時に名前が出てきたし、次元世界
平定の時にも出てきてる。古いものだと古代ベルカの聖王家回顧録
や複数の世界が崩壊した大規模次元震を綴った記録書。僕が知つて
る一番古いものだと始まりの国・アルハザードの歴史学者の日誌に
出てたはずだ。アルハザードの記録書や古代ベルカ時代にいた人だ
からジュエルシードのことを魔種青石って呼んでも不思議ではない
んだけど・・・・・

仕舞い込んでいた記憶を引きずり出したユーノはある可能性を思い
ついた

ワイズ・カオストーンは継承される名前なのかな?もしそうなら
様々な時代に名前があるのも納得できる・・・・・でも、確証が
ない。あの人は何か苦手だから、直接聞けないし・・・・はあ・・・・
・

ワイズのことを推察したユーノだが、前夜の出来事でワイズに
苦手意識が出来てしまったようだ

そんな時、コーノに念話が飛んできた

(おー、小動物。今、外に出れつか?)

(えつー!?あ、はい。出れます)

(なら、すぐに外に出て来い)

そう伝えるとワイズは念話を切ってしまった

コーノは溜息を吐き、外に出て行った

ワイズと呼び出されたコーノは近くの公園に来ていた

ワイズは肩に乗せているコーノに話しかけた

「んで、呼び出した理由だけよ」

その言葉にコーノはワイズの顔を見た

理由もなく呼び出したとしたら一言文句でも言おつかと考えていた
りしていた

「これから、魔法の練習やんだ。小動物から見ての感想や意見を聞
きてーと思つてな」

「はあ?それくらいなら別にいいけど?」

「うし。んじゃ結界張らないとなあ

」

妙にワクワクした様子でワイヤーは結界を張った。人避け、防音等色々な結界を重ねがけし、どこからともなく幾つもの木偶人形を取り出して接地している

このとき、ユーノは見たことの無い魔法を見る機会が出来た、そしてそのことを聞くことが出来るかもと考えていた

だが・・・・・・

「螺旋丸！！」

「捩れ飛んだ！？！？」

目の前で木偶人形が腹の部分から捩契られるのを見たり

「赤火砲！！
しゃつかほう

「木が！？木が燃えてるって！？！？」

火塊が命中した木が勢い良く燃えたり

「日輪
”天墜
“！！！」
におりん
てんつい

「地面が熔けてる！？！？ってゆーか、暑い！？！」

太陽光レーザーで熔ける地面の熱にやられたり

「轟き渡る雷の神槍！」

「雷の槍！？って、静電気で毛があああああつ！？！」

雷の槍の影響でユーノの全身の毛が思いつきり逆立つてボサボサになつたり

「影よ、あれ！？」

「影が犬に！？！？！？！？って、ぼくは餌じやなあああああああつ
い！？！？」

ワイズの影が変化した犬にユーノが追い回されたり

「次は・・・・・蒼の軌跡！」

「つて、噴水壊しちゃ・・・・・遅かつた・・・・・」

ユーノの制止の言葉が間に合わず、蒼い魔力衝撃が噴水を跡形もなく粉碎し水が間欠泉の如く噴き出したり

「次の目標は・・・・・あの木にするか。いくぜ！！」
「嘩^{ハウ}」
「！！！」
「滅びの咆^{ブ拉斯ティング}」

「口を開けて何を・・・・・つて、声が衝撃波に・・・つて、耳
がああああああああああ！？！？！？」

ワイスの声が衝撃波になり、標的となつた木を粉碎した。ワイスの肩にいたユーノはワイスの声の大きさに耳を塞いでいたが

「次でラストオーラー！闇よりもなお暗き存在、夜よりもなお深き存在、混沌の海よ、たゆたいし存在、金色なりし闇の王……」

「ちよつ！？なにその物騒そな呪文！？それはやめて――――――

「
え
」

最後と言つて唱えていた呪文を聞いたユーノが慌てて止めたりと、
そんなことがあつたりした

ワイズが一通り魔法を使い終わった公園は、あちらこちらに穴が開き、木々が倒れ捩れ燃えていた

ユーノはその光景に口を大きく開けて絶句していた

1個1個の魔法の威力もそうだけど、アレだけの魔力を使ってなんともない顔をしてるこの人って…………!!

「さて、帰るか」

黙りこくれているユーノを気にした様子もなく、ワイズはすつきりした表情でそう告げた

そんなワイズにユーノはあることを訊ねた

「えへと……」の惨状はどうするつもり?」

「あ?ああ。忘れてた。直さないと駄目だよな」

そう言つと、ワイズは徐に右手を正面にかざした

かざした右手には金色に輝く魔力が集まつていて、その魔力が公園内の様々な破壊された場所へと飛んでいきその場所を包み込んだ

「チエイスティティ発動、純潔。全てを有るべき姿に戻せ」

その言葉に反応し、金色の魔力が眩い光を放つた

その眩しさにユーノは思わず目を瞑ってしまった

暫くすると光りが落ち着き、ユーノは目を開くことができた

その視界に映つたのは、ワイズが魔法を使う前と全く変わらない公

園の姿だった

「…………あれだけの破損を一瞬で全部直すなんて……
…………」

「昨日も言つただろ。俺はワイス・カオストーン。生きる伝説、不老不死の体現、混沌の賢人だ。昨日の今日で忘れたつーと、かなりボケが進行してんじゃねーか？」

「ボケてません!!」

どちらかと言つと、ボケているのはワイスでユーノは突っ込みだ
公園内の修復を終えたワイスはもう用がないと公園の出口へと向かつた

公園から出る直前、ユーノはもう一度公園へ振り向いた。だが、やはり先ほどの破壊の痕跡はなく、結界の解除で入つて来た人が普通に歩いていた

この人は、本当にあのワイス・カオストーンなのか……?本当に不老不死……?

ユーノはまた思考の海に潜つてしまつた

そんなユーノをワイスはちらりと見るが、興味なさそうにユーノをなのはの家に届ける為、歩を進めたのだった

純潔：**ワイズ**が持つ七美德のうちの一つ。能力は下記の通り

純潔
(外部開放時・?・?)

ありとあらゆる破壊痕や異常状態を初期状態に戻す能力
破壊された建造物や汚染地域を始めとして、精神汚染や洗脳など、
個人レベルでの汚染にも対応出来るが、元の状態を把握していない
と元に戻すことは出来ない

使用対象を1個人に限定すれば、対象者の惡意さえも昇華することが
可能だが、対象者がその惡意を惡意と認識していなければ効果は
ない

ワイズが今回使用した漫画、小説の技について

実際にその技を使っているのではなく、魔力を使ってその技・魔法
を再現している為、元の技・魔法とは酷似しているが別の魔法にな
る。

‘螺旋丸’はチャクラではなく、魔力を使っての再現発動。 · 赤火
砲 · は魔力の炎熱変換での再現。 · 日輪^{（にちりん）}天墜^{（てんつい）} · は結界魔法をレ
ンズのように使っての再現。 · 轟^{（クンケ）}き渡る雷の神槍^{（ナール）} · は雷撃変換での
再現。 · 影よ、あれ · は魔力を使っての影の操作。 · 蒼の軌跡^{（しゃつか）} · は
魔力砲撃。 · 滅^{（ブロスティング）}びの咆哮^{（ハウル）} · は声に魔力で破壊能力を付与し再現。最
後の未使用で終わつた · 閻よりもなお暗き存在^{（もの）}、夜よりもなお深き
存在、混沌の海よ、たゆたいし存在、金色なりし闇の王 · · · も
魔力ワイズが持つている多数の能力で再現使用しようとしていた

上記の通り、元の技・魔法と酷似しているが、それとは別の魔法に
分類される

無印編第四話（後書き）

死食經典義「てな訳で、第四話をお送りしました。アニメだと2話でなのはが学校に行っている時間帯の話です」

ワイス「いやー、観客がいるときに使う魔法って気分いいわーー！」

死「すつきりした顔してるとなあ」

ワイス「おつーやっぱ観客いねーとなー」

死「さて、今回ワイスが使った魔法、わかる人いるでしょうか？気が向いたら感想に書いてくれると嬉しいです。解答は次回の前書きでやりますが（笑）」

ワイス「んじゅ、また次回会おーな

死「でわでわ～」

無印編第五話（前書き）

死食經典義「まづは前回ワイズが使つた魔な法の解か答くわ?」を
螺旋丸（NARUTO）。赤火砲（BLEACH）。日輪天（PS
YREN）。轟き渡る雷の神槍ネギマ。影よ、あれ（伝説の勇者の伝説）。
残りは面倒になつたので、各自でお調べください」「死ね」ぐべりつー。
？」

ワイズ「駄目作者は俺が鉄槌テツチを下しておいた」

ワイズはユーノをなのはの家に届けた後、一人近くの神社の石段に腰を下ろして、煙草を吹かしていた

「……なのはちゃんが学校から帰ってくるまで暇だな……」

「

もとい、暇を持て余していただけのようだ

(それなら、ゲームセンターでも行つたら? なのはちゃんにヌイグルミのプレゼントとか)

「今アソコは良いのがねえんだよ。他のも全部ランキング制覇しちまつたしょ」

そう、ワイズは近場のゲームセンターの全てのゲームのランキングを総なめにしてしまつていた

そのゲームセンターを利用している人の中には、彼を神と崇めて教えを請うる者までいるらしい

(……じゃあ、どうするのさ?)

「それを今考へてんだよ……ゲーセン以外でなんかねえーかね?」

(ジユエルシードを探すとかは?)

「……おい、アル。お前、俺がそーゆーの自分から

動くと思つてんのか?」

(だよねー)

さて、今ここにはワイズ一人しかいないのだが、ワイズは確かに誰かと話をしている

お気づきの方も既にいらっしゃるだろうが、ワイズが会話をしている相手はワイズの中にくつろいでいるアル。そう、ワイズが混沌の賢者の石になつてから初めて出会つた人間。はじまりの王、アルハザード・レティシア・アルフォルス

彼女と出会い、彼女の国で自らを完成させたワイズははじまりの國の崩壊の際、アルの魂と魔力を吸收同化した。それ以来、彼女は長い付き合いになつてている

アルは普段からワイズと感覚を共有しており、更に自分の魂も表面に出すことができるため、よくワイズとダベリングをしているのだ

何故、はじまりの国が崩壊したのか。何故ワイズはアルを吸收同化したのか。それらはまた別のお話となるので、またの機会に

「あ～・・・なんかおもしれーこと起きねえーかな。例えば、魔種ジュー
ルシード青石の複数同時暴走とか」

(それこそ面倒・・・・ん！？念話キヤツチ！-)

まあ、あながち間違ひではないだろうが・・・・・・何処からか苦

情が出そつた気もしないでもない

「んあ？」

（「△△はなのはちやんと△△君だね。どうする、割り込んでみる？）

「・・・そだな。小動物が何吹き込むかわからぬーし、聞いておくか」

ワイスはそう言いながら、煙草の火を消して携帯灰皿に吸殻を入れた

マナーはきちんと守りましょー！

+++++

聖祥大付属小のなのはのクラスでは、漢字の成り立ちについての授業をしている

なのはもその授業を聞き、ノートにとつてこる

が、それとはまた別にコーノと念話で会話をしていた

それでもちゃんと授業が頭に入っているのだから大したものだ

（ジユエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ）

（古代遺産って・・・昔の人の生活跡や残した道具だよね？）

(そう。本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発言が不安定で、タベみたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合も有るし、たまたま見つけた人や動物が間違つて使用してしまって、それを取り込んで暴走することもある)

(そんな危ないものが、どうしてうちの近所に?)

そう、確かに危険だ。例えて言うなら、自分の家の下にいつ爆発するかわからない不発弾があるようなものかもしれない。ちょっとした衝撃で爆発する不発弾、変な例えかもしれないが・・・

しかも、地球には魔法文化はない。では何故ジュエルシードが海鳴にあるのか?

(・・・・・僕のせいなんだ・・・・)

ユーノは、自分が遺跡発掘を生業にしてること。あるとき遺跡から21個のジュエルシードを発見したこと。それを輸送中に事故かなんらかの要因の人為的災害で地球に散らばってしまったことをなのはに伝えた

(今まで見つけられたのは、まだ3つ・・・・)

(あと18個かあ・・・・)

そんな2人の念話に、ワイズが割り込んできた

(横から失礼)

(あ、ワイズさん)

(「いくつか小動物に言つておきてえー」とがあつてな)

(なんでしょうか?)

ワーズはそこで一旦溜めを作つてから、一息に一気に纏めて言い出した

(ジュエルシードは手にした者の願いを叶える魔法の石じゃなく手にした者が第3者の願いを叶えるもので元々がそういうものなのに無理に自分の願いを叶えようとするから力の発言が不安定になつて暴走するんだつーのそれにちゃんとした処理を施したとこに保管しておかねえーから周囲の複数の生物の深層心理の願望を感じ取つてしまつて単体で暴走すんだ使用者を求めて周囲に危害を加えるのは複数の自己願望を取り込んでるせーだし生物を取り込むのはその方が楽に移動とかができるからなんだつーか輸送途中に人為的災害にあつたつーたがそもそもスクライア一族が掘り返さなきやこんなことはなつてねーんじやねーか俺はちゃんといろんなここに掘り返すなーとか封印をとくなーとかそういう文章もちゃんと残しておいたはずなんだがまさか知らなかつたなんつーこたーねえーよな?)

本当に纏めて一息で言いました。言つのはいいが、読点・句点がなくて読みにくく……

ワーズが言つたことに、コーノは呆気にとられた

(言われて見れば……古代文字で『封印とくべかいぢ』って書いてあつたような……)

黙つてしまつたコーノに気を使つたのか、なのはが念話を再開した

(あれ？ちゅうと待つて。ジュエルシードが散りばめられたのって、全然ユーノ君のせいじゃないんじゃ？)

(でも、あれを見つけたのは僕だ。全部集めてあるべき場所に戻さないと……)

(そんでもって、いざやつてみたら現事に返づけられると)

(もうワイヤーなん一ちゃかさないでなのー！)

(へーー)

まあ、今ワイヤーは暇だから、ユーノを弄ったのだろう

なのはに言われて弄ることはなくなつたが、時折冗談を言つことは止めなかつたワイヤーだった

学校が終わり、すすか、アリサと別れたなのはは一人、家に向かつていた

(やうやく家に着くよ。取り合えず、一緒におやつ食べようか 今田のおやつはなにかなー！)

そんな時、なのはは何かを感じ取つた

その感じ取った何かは、タベジュエルシードが発動したときに感じたものと同じだった

(ユーノ君、これって!)

(うん。新しいジュエルシードが発動した。すぐ近く!)

(どうすれば!?)

(一緒に向かおう。手伝って!)

「うん」

なのははその場から走り出し、ジュエルシードが発動した場所へと向かった

ジュエルシードが発動したのはワイスも感じ取っており、「えー・・・」といつ顔で後ろの神社を見上げた

(ワイスさんー・ジュエルシードが!)

見上げたのとほぼ同時になのはから念話が届いた

(ああ、俺もちやーんと発動は感じた、つーか発動した神社のすぐ下にいるんだわ)

(本当!?)

(ワイスさんー・僕達が付くまで足止めをお願いできませんか!)

そう、ジュエルシーードが発動したのは、ワイズが座り込んでいた石段の上にある神社の境内

先ほどワイズが見上げたのは、「何で俺のすぐ側で発動すんだよ」つてことで見上げたのだ

（はあ・・・了解。俺じゃまともな封印はできねー。マジで足止めしかできねーから、なのはちゃんの早い到着を待ってるぜえーい）

（はいなの！）

念話を終えたワイズは石段を登り、境内へと入った

そこには若い女性が倒れていて、さらにその奥には4ツ目で体のあちこちに青い珠がある大きな黒い犬のような生物がいた

「・・・・・・犬でも取り込んだか？」

その呟きに反応したのか、黒い犬はワイズに飛び掛った

「グオオオオ！」

ワイズは慌てる様子もなく軽々と避け、ついでとばかりに前足を取つて投げ飛ばした

黒い犬はすぐに体勢を直し、ワイズを睨み付けた

だが、ワイズは何処吹く風とばかりに新しい煙草に火をつけた

「めんでえーなあ・・・ビーやつて足止めすつかねえ」

(バインドとかで動き封じちゃつたら~)

「それだと芸がねえーだろ？折角のイベントなんだしよ」

(なら、ハシカイ嫉妬で何かになつたら~)

アルの発言に、ワイズはパチンと指を鳴らした

「いいな、それ。んじゃ、何になるかだな。何がいいかな~っと」

アルと会話しているワイズだが、その会話をしている間に何度も黒い犬が飛び掛つて来ていたが、その度に始めと同じように投げ飛ばしていた

数回投げられた黒い犬は、ワイズをどう倒すか考えているのか、その場で唸りをあげて睨み付けている

「よつしゃー熊にしょつー最近でかい熊の魂も吸収したことだしなー！」

(熊・・・ああ、あれね。でも、なのはぢゃん達が到着したらビッタリしないかな?)

「そんなんは後で考えればいいって。そんじゅま、行きますかあつ~！」

そつぱつたワイズの体からは魔力が噴き出し、陽炎の如く揺らめいていた

そして右手で自分の顔を覆い、叫んだ

「エンガイ 嫉妬発動！変つ！身！」

（今よ、開けく～ま～ オープンワイズ）

・・・・・色々と突っ込みたいが、突っ込んだところで聞く耳は持たないだろうし、何より突っ込みを入れれる者がいはここにいない

叫んだワイズを噴き出していた魔力が包み込み、白い輝きを放った

その光りに黒い犬は眩しそうに目を細めた

その光りが収まると、その場にはワイズではない、巨大な生き物が立っていた

その生き物は熊だと気づくことはわかる

だが、その熊は普通の熊を違ひ全体の毛が翠色、頭頂部から臀部にかけて鱗で出来たような甲殻で覆われている。肘から下も棘の付いている手甲のような甲殻が付いており、手に生えている爪も普通の熊よりも長く鋭い

青い熊の獣。そう、わかる人はもうわかつただろうが、青熊獣・アオアシラだ

嫉妬の能力を使うためには、変化する対象の魂が必要になるのだが、一体どこでゲームにててくるモンスターの魂などを手に入れたのだろうか？

「グルウウウウ・・・ウオオオオオオオオオン！！」

姿の変わったワイズに向け、黒い犬は威嚇の雄叫びを上げる

「ウウウウ・・・グガアアアアアアアアアアツー！」

それに応えるかのように、ワイズもまた雄叫びを上げた

そして、同時に畠の前の敵へ向けて飛び出した

† † † † † † † † † †

ワイスに遅れる」と数分。なのはとヨリノが神社の境内に到着した

そこでなのは達が見たものは・・・・・

۱۰۸

境内の中心に我が物顔でドカツと座り込んでいる熊だつた

ジユエルシーードが発動したのは間違いなくJの境内。そしてJに見慣れない熊がいる

ユーノはこの熊がジユエルシードが現住生物を取り込んで実体化したものではないかと推測を立てた

「・・・ワイズさんは何処なの?」

対しなのははーにーにいるはずのワイヤーズの姿を探し、辺りを見回していた

そんなんのはとユーノはふと視線を感じ、熊を見た。そしてぱっちりと熊と田^たが合つた

「 ユーノ、ユーノ君ー熊さんと田^たが合つちやつた！？」

「 ととと、取り合えずーあの熊からジュエルシードの反応があるから、封印しないとーー！」

視線が合つたことで動搖している2人に、熊は・・・

「 ガウツ」

右前足^{みぎあし}で自分が座っている場所を指・・・いや、爪で差した

その場所をよく見てみると、熊は何かの上に座り込んでいたのがわかつた

なのは達は体をざらし、見る角度を変えた。そうしたら、その何かが黒い犬のような生物だということに気がつけた

椅子代わりにされている黒い犬は正しくボロボロといった姿で、気絶しているのか動く気配が全くない

なのは達が黒い犬を確認したからか、熊は立ち上がりなのは達の方へ歩き出した

「 ・・・つー？」

向かつてぐる熊にコーノは警戒した。だが、その警戒はすぐに解く事になる

熊は歩きながら左前足を顔に持つていく
ひだりて

すると熊の体が光り、その輪郭が変化し、光が収まつた頃にはワイズの姿になつていた

「嫉妬解除つと
エンヴィー

」・・・・・

なのはとユーノは言葉も出ないのか、唯々ワイヤーズを見ているだけだ
つた

そんな2人にワイルズは、声をかけた

「足止めはしどいたぜ。封印、よろ~」

「…………あ、はい。なのは、レイジングハートを」

「……………あ、うん。レイジングハート、お願い」

up [ʌp] All right · stand by Ready · set

再起動を果たしたのはレイジングハートを起動させ、バリアジヤケツトを身に纏い、レイジングハートを黒い犬に向かた

「ジユエルシード、封印」

〔 Seal. 〕

「『ガアツー。』

ジユエルシードを封印しようとした時、黒い犬が突如起き上がり鳥居の上に飛び乗った

そしてこの場所から逃げようとする本能が生み出したのだろう、1対の翼を背中に作り出し空へと飛び上がった。

「逃げるつもりだ！ 追いかけないと……」

「レイジングハート、昨日の空を飛んだの。出来る？」

〔 Yes . Flyer fin 〕

なのはの願いを聞いたレイジングハートは、昨晩飛行のために使用した魔法・フライヤーフィンを発動させた

それによりなのは黒い犬を追つて空へと上がるが、黒い犬は既にかなり遠くまで移動してしまっていた

移動先には森と山しかなかったのは幸いだらう。もし街の方に向けて飛んでいつてしまっていたら、一般人に目撃されたかもしそれない

なのはは黒い犬を追いかけるが、その距離はなかなか縮まらない

「……」そのままじゃ、追いつけない。レイジングハート、もつとスピード出せないかな？」

〔A11 right · Flyer fin boost up〕

レイジングハートが行つたのはフライヤーフィンのブースト。このブーストでなのはの背中に付いていた羽のアクセサリーが巨大化し、天使の翼のように広がつた

「うわあ、すばらしい……」

〔Ready go〕（こきま出す）

「うん……あやああああああーーー？」

この翼、フライヤーフィンの加速性能を上げるために出したものだが、その加速度合いは先ほどの倍以上となつていて

例えば、時速20kmで走行していたときにはいきなり40kmまで加速したと考えるといいかかもしれない

人間、急な加速には慣れないものである

だが、その急激な加速のお陰で黒い犬に追いつき、追い越すこと�이出來た

「つて、追い越しや駄目なの！」

そういう、なのはは急制動をかけた

だが既に黒い犬を100メートルくらい追い越していたうえに、その黒い犬もヒターンして再度逃げようとしていた

「レイジングハート！」の距離で封印できる方法、何かない？」

「Is that's for you desire」（あなたが、それを望むなら）

レイジングハートの言葉になのはは空中で止まつた

すると、なのはは胸の奥でリンカーノアが鼓動するのを感じ、レイジングハートはなのはの足元に魔方陣を開いた

「That's right. Focus your intent
rnal spiritual heat to your arms」（そうです。胸の奥の熱い塊を、両腕に集めて）

なのはは言われたとおり、両腕に魔力を集める。そして、前方にいる黒い犬へとレイジングハートを構えた

「Mode change · Cannon Mode」

なのはの魔力を受け取ったレイジングハートがその形態を変形させる前方に魔力を集中させるためにヘッドが金色を基調とした音叉状の形態になりそれを白いカバーが覆い、ブームが伸びる。そしてピンク色の光の羽根が広がり、トリガーユニットが現れる

なのはがトリガーユニットを握ると、音叉の中心にライフルの銃身のような砲身が現れた

その様子は境内にいたワイズ達にも見えており、ユーノはポツリと呟いた

「まさか、封印砲? なのはは砲撃型・・・」

砲撃型の魔導師はその数が少ない。その数少ない砲撃型が魔法文化のない地球で見つかったことにユーノは驚いていた

それに対しワイズは、自身の中にはアルにこんなことを聞いていた
背中の翼に合わせんなら、バスター・ライフルの方がいいと思わねえか?

(それも両手持ちだつたら、完璧だね)

ワイズのそんな場違いな考えにワイズの中で賛同するアル

お前ら、手伝おうとは思わないのかと突っ込みをいれたい

「Shoot in Buster Mode. Immediately fire when target is locked」
『直射砲』形態で発射します。ロックオンの瞬間にトリガーを)

なのはには逃げる黒い犬をマーカーが追いかけている映像が見えていた

そのマーカーが黒い犬を捉えた瞬間、なのははトリガーを引いた

発射の衝撃でなのははバランスを崩し、魔方陣へと倒れこんだ

だが、砲身から撃たれた魔力は、逃げる黒い犬へと迫る

何かを感じたのか黒い犬は後ろを振り向く。そして、自らの視界が
ピンク色で埋め尽くされ、ピンク色の魔力の奔流の中へと飲み込まれた

「グオオオオオオオオ…………」

その叫びもすぐになくなつた

「N.i c e s h o t」

レイジングハートはなのはに賞賛を贈るが、そのなのはは自らが擊つたモノに怖れを抱いたのか、手が震えていた

そんな時、消えていく魔力の奔流の中から何かが落ちた

落ちたのは1匹の子犬。この子犬がジュエルシードの影響で、あの黒い犬になっていたのだろう

それを見たなのはは叫んだ

「わんちゃんが！」

今なのはがいる場所からはギリギリ間に合わない

なのはの脳裏に子犬が地面へとぶつかる映像が浮かんだ

「ダメええええええええええ！」

その叫びに応える者はこの場所に・・・・・・・・・・・・

存在した

彼は、元々いた場所に大きな砂埃を巻き上げ、子犬へと一直線に飛んだ

そして、子犬に衝撃が伝わらないように優しく受け止めると、その子犬を抱いたままのはの元へと飛んだ

「お疲れ様、なのはちゃん。わんこも無事だ、頑張ったな」

なのはに労いの言葉をワイヤズは微笑を浮かべながら言った

その笑顔を見たなのはも笑顔でワイヤズに答えた

「ありがとうなの！」

そんななのはの手の震えは、いつの間にか止まっていた

「Internationalize No.16」

境内に戻つたなのはとワイヤズは、レイジングハートヘジュエルシードを収納した

「コレで4つ目・・・」

「封印したのは16、18、20、21か。残りは17個つーことだな。一体何処にあるやう」

今回確保したジュエルシードと残りのジュエルシードの「」とを考えるワイズとなのは

……………ユーノの姿が見当たらない？何処に行つたのか？

「さゆう～～…………」

境内の少し離れた場所で目を回していた

（原因）

「ダメええええええええ！」

なのはのその叫びはワイズの耳にも届いていた

「俺なら十一分に間に合ひつ距離だな。よし、ちょっとくら行つてくる」

「え、あ、はい」

「発動せよ、傲慢^{プライド}。全てを創造する力で新たなベクトルを生み出せ！…」

ワイズの魔力を帶びた言靈が周囲の空間に染み渡る

さつきは嫉妬^{エングヴィード}、今は傲慢^{プライド}。…………文献にあつた混沌の賢人の七大罪のうちの二つじゃないか！

ユーノは過去に見た文献に記されていた混沌の賢人の持つ力の一文

を思い出していた

だが、そんなことをしている間に今いる場所から逃げるべきだった
と、ヨーノは後悔した

「レッジゴー！」

ベクトルを操作したワイズが思いつきり地面を蹴り、その際起きた衝撃波でユーノは吹き飛んだ

さらに不幸なことに吹き飛んだ先に何故か石があり、それに頭をぶつけてしまったユーノであった

そしてワイス達はコーノがないことに気がついたのは、高町家で夕食を取つてゐるときだったとさ

ステータス情報が更新されました

嫉妬・エンヴィー（外部開放時・スキル・？？？）

自身の外見を変化させる能力。（参考）

魂が自分の中になければ変化できない

ワイスが変化対象者の魂を保持している場合、その魂を表に浮上させることで、その人物そのものになることが可能

なのはの父・士郎を治療した時、アルの外見になつたうえでアルの魂を浮上させて治療を行つてゐる

魂がなければ、その対象になれないはずなのだが、当話でワイスはアオアシラに変化している

一体何処でどうやって、アオアシラの魂を取り込んだのやら・・・

傲慢・プライド（外部開放時・？？？）

世界にイメージを投射し、顕現させる能力。明確なイメージが出来なければ顕現させることは出来ない

ワイスが使う漫画や小説の魔法、武器の殆どはコレで作り出していくことが多い

生命体の投射は肉体に限り可能（所謂、魂のない肉の塊）。その肉体にワイスの内に眠っている他者の魂を入れることで、一時的な蘇生は可能

この能力で生み出したものは、ワイスの意思で消去可能

この世の全ては自分の所有物だと言つたのは某英雄王。対してこの世全てのモノは自分が生み出すといったのはワイス

どちらも傲慢といつても過言ではないと思つるのは作者だけだろうか？

なのはヒューリギングハートの使用した魔法とカノンモードについて
フライヤーフайнのブースト、これはそのままブーストさせただけです

アクセルファインやフラッシュミューブがあるのでといふ声もあるでしょうが、アクセルファインはA-sでの登場なので使用不可。フライ

ツシユムーブはフェイントのブリッジアクションに対抗して編み出したもので、今作のなのははまだフェイントと出会つてないので使用不可とこう訳で、単純にブーストをさせました。ブースト時の天使の翼は、まあ始めからこうするつもりで背中にアクセサリーとして付けてた訳です、ハイ

カノンモードについて

劇場版のカノンモードとほぼ同じですが、音叉状の先端の間に砲身が追加されています

カノンと聞いたなのはのイメージが反映された形になつております

この砲身は無駄ではなく、撃つた砲撃の速度を向上させる能力が付随しているが、当の本人はそんなことは全く気がついてないという状況

のちのち気がつく・・・・かもしないし、気が付かないままかもしけない

無印編第五話（後書き）

死食經典義「痛いジャマイカ！！」

ワイズ「痛いですんでるてめえが怖えわ！！」

死「遠距離ドライブで疲れてるからだに鞭撻つて更新を頑張ったんだから、もつといたわれ！！」

ワイズ「今週中にもう一回更新したらいたわってやるーー！」

死「…………」めんなさい

ワイズ「…………謝られてもいるんだが…………」

なのは「と、取り合えず、感想とか待つてますな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1840/>

魔法少女リリカルなのは -混沌の賢人-

2011年4月14日13時32分発行